249-44

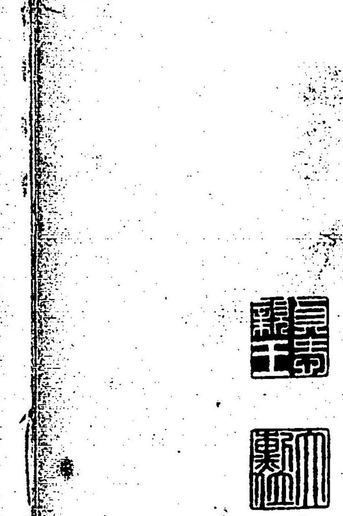
病

45.1.20
内交

奉

敕

愛親至



序

精忠敵愾義勇奉公水火不避
甘霆鋒鏑其心事光明亮々軒
天地
朝廷特建靖國之祠以祀其英
靈爾來四十年經大戰數次所

祀以萬數不可無記載乃命編
靖國神社誌嗚呼國家百年可
無權輿之士一日不可無義勇
之民也斯書之成予安得不樂
而序之哉

陸軍大臣伯爵寺内正毅

序

敬みて按するに國家に偉勲ある英
靈の為めに神社を建て祭祀を擧け
其功を稱へ其徳を仰くは我邦古來
の美風なり而して靖國神社の如き
は蓋し其崇たるものと謂ふつき乎
惟ふに本社祭神の功績たるや前古
未聞の　皇業を翼賛し社稷の經營

たるや　勅命に因りて起り結黨の
興たるや親王之を舉からしむるの
駕の　親臨前後已に七回を算ふる
等他に多く其倫比を見さる所なり
此の如く特殊の神社なれい則ち特
殊の歴史を有す宜しく之を誌して
世に傳ふへし頃者賀茂宮司來りて
其事の成るを告く之を諾くに緣起

沿革の敘説約にして要を得たり庶
幾くい之に由りて靖國神社を世に
公にして國民元氣の作興に資する
ところあらん乎單り當局者の幸慶
のみにあらさるなり乃ち聊か所感
を書して序と為す
明治四十三年七月
海軍大臣男爵齋藤實

緒言

靖國神社は、皇上御仁德の餘澤と、國民盡忠の精神との結晶にして、明治の昭代に於ける精華なることは、今更喋々を竢たず。されば他の幾多の神社に異れる由緒と、特例とを有せること勿論なり。忠魂を慰むる爲に神社を建てゝ永く祭祀せむ、益、忠節を抽でよ、との最忝き叡慮によりて創建せられしが如き。○出雲大社は似たるものあり。これ天孫降臨の時に於けることなり、天孫降臨と、明治維新とは、歴史上の二大事件にして、而して出雲大社と、靖國神社との建立は偶然に非ざるべし、この事は曩に予が編纂せる靖國神社事歴大要に述べたり。

例祭日を年中數回に勅定あらせられしが如き。其祭典は凡て勅旨を以て行はせ給ひしが如き。○例祭の御祭文に(前略)年毎乃此月乃今日乃祭乎永例止武官乃人等爾命世豆種々乃物等乎備奉利齋祭良世給布此狀乎聞食豆天皇乃爾守幸波倍給倍(下略)とあり、祭主の祝詞に大御代乎動久事無久佐夜久事無久常石爾堅石大御詔乎奉里豆官位姓名諸乃神靈等乃御前爾白久とあるにても知るべし、事本文に委し。且例祭に勅使を御差遣あらせらるゝが如き。

その祭神數の國家の隆昌と與に增加し給ふが如き。各郡村に亘りて祭神の遺族あらざるなく、翕然として國民の崇敬を一にせるが如き。是他神社に異る由緒と特例なりとす。されば皇室の御殊遇は申も恐し、國家の敬待亦異るものあり。而して祭神の靈德に至りては更に掲焉なりとす。義勇公に奉じ天壤無窮の皇運を扶翼し奉り。生きては不滅の勳業を建てゝ、國家を泰山の安きに置き、死しては不朽の感化を垂れて、極天皇基を守護し給へるが如き。わが大和民性の標識として千木高く雲際に仰がれ、國家元氣の神藪として宮柱動きなく、萬世に齊はれ給ふ。斯る特別神社なれば自ら、一般の神社法規を以て律すべからざるものあり。此書を見るもの亦、其意を以てせざるべからず。

抑も神社誌編纂のことは、前々任青山宮司濟、前任賀茂宮司水穗共にこれを企てたりき。青山宮司は當時の禰宜、黒神直臣をして其編纂に當らしめしが、幾許もなく禰宜の不幸に接して止み。前宮司は主典井上賴敎に之を命じ、將に其緒に就かんとして卒しぬ。予、一昨四十二年春就職して、神社誌の必要にして、前任者の意を空うすべからざるを思ひ、敢て菲謝を顧みず、命を當時の陸軍大臣寺內閣下に請けて、奉務の餘暇を以て自ら之に從事することゝし、禰宜以下の職員にも餘暇ある時には、必ず之を補助せしめ、或は公廨に出でゝ記錄を拔抄し、或は諸家を訪ひて材料を收集す。當時予はもとより、職員何れも近年の就任者にして、神社過去の事歷に通ずる者なく、恥か困難を感じたることありしも、幸にして一年を出でずして、此書

を編纂することを得たり。因て昨四十三年六月二十六日之を大臣閣下に捧呈す。時に閣下は韓國統監として其任に赴かれむとして、多端を極められたりしかど、曲に披見せられて尚、當時の陸軍省副官山田大佐に附して通覽せしめられたり。斯くて本年七月十二日之れが發刊の認可を得て、更に陸軍省副官に提出して檢閲を經、茲に刊行に附するに至れるなり。

斯く、此書は稿を脫してより發行に至るまで、殆一年半を經たれば其間、祭神の御增加、勅使の御差遣、皇室の御奉納、特別寄附金の交附及修繕新築等の事ありて異動を生じ、修正を要するに至れるものありき。これらは出版に際してある項には增補し置きたれども、總て此間に於けることは、事歷の項末に追加として收載し參考に供ふることゝなしぬ。○假令ば祭神總數の如き、祭神の項にある六百三十一名を合算して、現在の總數を知る等の如し。この追加の條元

來此書は、記錄の保存と、事實の收載とを旨としたれば、唯文字を臚列したるに、過ぎず。これ慾に管見を敢てせんよりは、當時の文書をそのまゝに揭げたるかた、却て事實を明瞭ならしむべしと思へばなり。誤謬遺漏の如きは、他日更に修補改竄を期せんとす。

此書の開卷に殿下の御題字を賜はりしは、無上の光榮とする所なり。

此書編纂に付ては、前陸軍省副官立花大佐（小一郎、現今近衛第一旅團長）同山田大佐（隆一、現今第十一旅團長）陸軍省副官竹島大佐（音次郎）同高須少佐（俊次）陸軍大臣官房大津留主計（重及前海軍省副官井出大佐（謙治、現今造船監督官）海軍省副官小栗大佐（孝三郎）等其他關係諸官の配慮を煩はしたること多し。又陸軍大將

大久保男爵、樞密顧問官船越男爵、内苑頭式部官福羽子爵等の示教を受けしことも少からず、茲に感謝の意を表す。而して神社職員福宜大橋朗、主典井上賴致、日比與三郎、豐永貢、新海肇、社掌川浦重作等は克く之を補助したり。併せて其勞を附記す。

明治四十四年十一月

宮司　賀茂百樹

例言

一　本書の記事は招魂社の創掛に起り明治四十三年五月の合祀祭に止む。その間四十一年、之を分ちて三期となすを得べし。第一期は招魂社と稱せし時にして明治十二年六月まで十年間。（祭典及事務をば神職掌り經理は陸軍省にて管掌せり、）第二期は社格の制定せられてより明治二十二年まで十年間。（祭典及事務をば神職掌り經理は陸軍省にて管理せり、）第三期は同二十二年以後。（祭典事務、經理、凡て神職の掌る所となれり、）之なり。

一　本書を編するに當り參考書類の集收に困難せり。前項の第一期間は社司日記布達類の外徵すべきものなく、第二期を經て第三期に至り稍〻備はれるが如しと雖、時に記錄の散佚して事相の明瞭を缺くものあり。得るに隨つて編成に力めたれども、猶隔靴搔痒の憾なきを得ず。

一　各部門に參照として當時の祝詞、達文、日記等を掲げたるは本編に述ぶる所のみにては、その事情を盡す能はざれば、互に相待ちて得る所あらしめんとてなり。故に本編に述べずと雖ども、本編に屬すべきものにして後の參考ともなるべきものは、參照中に掲げ置きたり。

一　參照に列載せる書類中には、誤寫脫字と思はるゝもの有れども、原文に從つて載せ妄に取捨改竄せず。その編者の注意を加へたるものは〔編者云〕を以てしたり。

一　各部門に關聯せる參照書類は、其主要に依て之を該部に專載し、重複することなからしめたり。

一　皇族御參拜のことは、重大なれば詳記せざるべからず。然れども、記錄完全ならざれば悉く之を知ることを得ず。例祭毎に何れの宮か御參拜のことあらせらるゝを、或は記し或は記し奉らざるが如きは、却て敬意を失ふを以て寧ろ之を略することゝなしたり。

一　祭主の字は、創業の際より用ゐられたれば今妄に改めず。

一　御祭文、祭神名、及遊就館什具等のことは、本書の能く盡すべきにあらざれば凡て之を略し、他日別に、祭神名索引、同略傳、祭文、祝詞集、遊就館物品目錄等を編せんとす。

一　本書中に年中行事を加へなば、事歷更に明瞭なるべけれども、本社の年中行事は明治六年制定し、同十二年に改正せられたるものにて、爾來三十餘年を經て更に再改訂の必要あれば、亦之を他日に讓ることゝなせり。

一　經理のことは更に明瞭を要す。然れども明治二十九年陸軍大

臣官房軍吏の編纂に係る創立以來收支計算書一册ありて、明晰詳細なれば本書には其大要を掲ぐることゝなしたり。

一　祭神の項の參照に贈位祭神名及婦人祭神名を特記せるは、參考に掲げたるのみ、祭神に甲乙あるにあらず、又其名の傍にイ何とあるは祭神帳以外の一本を示せるなり。

一　事歷年表は事歷の概要を知らしめんが爲に添へたるものなれば、明治十二年社格制定せられて以來常例となれる事は、例大祭の外凡て之を略したり。

一　本書に平出閼字の例を用ゐざるは、明治五年八月式部寮の定に從へるなり。然れども其參照書類に至りては、之を本文のまゝにして改めず。

明治四十三年六月

靖國神社誌目次

起源……一
名稱……五
祭神……八
祭日……二
社地……七
殿宇……二
社領……四
鳥居……五
神苑……七
招魂場……八

例大祭……八十
恒例諸祭……八十五
合祀祭 附招魂式……八十七
臨時諸祭……百 二
祭 儀 附神饌、幣帛、神寶、奏樂……百 七
報 賽……百十二
餘 興 相撲、競馬、能樂、煙火、其他……百十四
行幸 行啓 天皇 皇后及御代拜 皇太子、皇太子妃……百十八
勅 使……百二十六
東宮御使幷御奉納 附內親王御奉納……百三十一
幣帛幷祭資金……百三十三

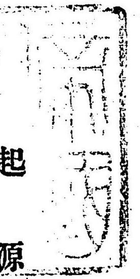
皇族御奉納……百三十五
特別寄附金……百四十一
諸參拜 官員、軍隊、遺族、庶人、外人……百四十三
寶 物……百四十七
祭 主……百四十九
委員長 附委員……百五十九
參列官員……百六十二
職 員……百 七十
經 理……百七十七
警 衞……百七十八
管轄廳……百八十一

能樂堂……百八十三
相撲場……百八十五
遊就館……百八十六
圖書館……百九十二
雜載……百九十二
事歷年表……二百

靖國神社誌

靖國神社宮司　賀茂百樹編

起源



謹みて按ずるに、皇祖國を建て統を垂れ給ひしより、列聖相承け億兆を慈育し給ひて、恩徳洽く民心に孚し、深く肺腑に徹しぬれば、臣民唯皇室の御爲めに身を獻げて忠勇事にしたがひ、死しても亦護國の神たらむことを期す。生死一貫國家に對する赤誠は、この國民の性格となり、遂に我國體の美を濟し、國史の粋を作るに至りぬ。それ、敬神尚武は政教の大本にして、忠勇は國家の元氣なり。國家の元氣は強健ならざるべからず。是れ古來神社を建設し、忠勇の神靈を

奉祀して偉烈を顯彰し、威靈を欽仰する所以なり。されば此事の獨り我國にのみ存して、他國に之なきは、固より然る所なりとす。而して幕府施政の末期、時運窮極し、内憂外患荐りに臻るや、勤王の志士雲の如くに起り、元氣の醞醸する所、王政復古の大業を激成し、進取の國是、維新にして、明治二十七八年役を經、明治三十七八年役にいたりて、有史以來未曾有の偉績を奏し、東洋の局面を一變し、世界の歴史に異彩を放つに至りぬ。神州正大の氣の靈動遺憾なしと謂ふべし。されど嘉永癸丑以降、忠憤義烈殉難死節の偉丈夫を失ひたること亦夥し。是に於てか先帝大に之を愍ませたまひ、民間に於ても志士また志士を追念し、神州の特風として靈祭擧行の議を提唱し、文久二年壬戌十二月、福羽美靜、古川躬行等、其他六十有餘名、平安

靈山に會して私祭を擧げ（○文久二年に至り、安政五年以來國事に死せし者を追赦する旨の詔あり、是に因りて此弔祭を執行する事を得しなり、同祝詞中に志士の追祭と神祇官再興とを建白せしことと見ゆ、後二つながら實行せられたり。）其翌三年七月には津和野藩士等相會し祇園社（○京都）内に小祠を建てゝ弔祭を行ひたりき。（○祝詞に近く公儀より祭祀せらるべき筈なれども、未だ叡慮に任せたまはざるを以て行ふとあり、以て當時の狀況を察すべし。後に幕府の嫌疑を恐れ小祠を毀ち、靈璽をば福羽子爵の宅に移しゝが、今猶之を存せり。）此後五年を經て（○此頃各藩に於ても私祭を行ひしものあり、長門國山及周防國吉敷郡下宇野令の招魂社の如きは元治元年の設置なり、これら各藩を通じて現今百○五社あり、之を官祭招魂社と稱す。）明治元年有栖川宮熾仁親王東征大總督として東國を鎭撫し給ふや、同年四月二十八日令旨を下して陣歿者の爲めに招魂祭を行ふ旨達せられ、六月二日江戸城内西丸大廣間に於て莊嚴なる祭典を行ひ、有栖川大總督宮、三條實美及諸卿太夫、各藩隊長、司令官列座の間に、鼓樂洋々威儀様々として大に神靈を慰め、諸士の心を安んぜしめたり。（○これを東京招魂社の起源とも謂ふべし。）次で朝

廷に於ては、五月十日を以て癸丑以來殉難者の靈を東山に祭祀する旨仰出され、同七月十日十一兩日に河東操練場に於て祭典を擧行せられき。○これ京都招魂社の始めなり、斯く招魂祭は江戸○此年八月東京と改稱せらる、京都兩地に行はれしが、翌二年三月東京に奠都あらせらるゝや、更に招魂社建設の議起りて軍務官知官事嘉彰親王勅を奉じたまひ、大村益次郎、香川敬三、船越洋之助、增田虎之助、佐藤嘉七郎、松岡新七郎等をして社地を相せしめられ、○始め上野又は江戸見坂上を以て其地に擬せしものありしが、九段坂上は宮城の乾に位して高燥の良地なりとて、大村氏自ら出張して選定せしなりと云、終に九段坂上に選定して、六月十二日を以て其地を實測し、同十九日起工、日ならずして假殿の竣成を見るに至れり。是を以て同月二十九日より七月三日まで祭典の儀仰出され、鎭祭の式を擧けらる。○始め二十八日より七月二日までに定められしを、二十八日に改められしなり、其は神祇官へ行幸あらせらるゝに依り、かくは改められしなり、

の祭る所の神靈は、伏見鳥羽の役より函館の役に至る三千五百八十八柱にして、○嘉永癸丑以後の殉難死士の靈は、京都招魂社に祀られたればなり、後にこれらの神靈をも本神社に合祀せらるゝことゝなりしこと、合祀祭の項に述べたり、參照すべし、其前日、卽ち二十八日申の刻清祓を修め、同夜丑刻に招魂の式を擧げ、翌二十九日に彈正大弼五辻安仲勅使として參向し勅幣を奉り、副知官事大村益次郎之を請けて內陣に納め、次で知官事嘉彰親王祭主として祝詞を讀み給ひ、畢りて參列の官員、華族、各藩人をして拜禮せしめられ、其翌三十日より七月三日までは、祝部をして祭典に當らしめ、角力、煙火等の餘興、ありき。また各隊をして順次祝砲を發せしめらる。○發砲順序は大砲隊、遊軍隊、第三番大隊、第四番大隊、第五番大隊、松代藩、久留米藩、和歌山藩、土州小銃隊、武庫と定められる、而して人民より供物餘興等を奉納せんとするものは之を許容し、且祭典中參拜者には神酒を賜ひ、特に戰死者を出しゝ各藩に

は神饌を分つこと各級あり。○これを遣族待遇の始とすべし。斯く鎭祭の式は極めて莊嚴に擧げられ、祝部、樂人、其他關係せし人々に物を賜ひて其勞を表せられき。以て其嚴重なるを見るべし。これを本神社鎭祭の起源とす。固より叡慮によりておこり、國體に適合せる擧なれば、年と共に愈々人心に感孚し明治十二年社號を賜ひ社格を附せられ、○當時祭神數壹萬八百餘柱なり。祭神の項參照すべし、長へに祭祀の典を擧げしめられ、畏くも萬乘の尊を以てして崇敬の禮を加へさせ給へば、至誠至忠なる我祭神の威德は赫々として內外萬邦に輝き、臣子後昆永く聖慮の辱きを念ひ、天壤無窮の帝道と與に臣道の發揚亦盡くる期なからんこと。神州の生民誰か額手して祝福せざるものあらむ。

（如蘭日誌卷二十二）文久二年壬戌十二月廿四日志士靈山ニ會シテ殉難死節ノ靈魂ヲ私祭セシコトアリ、コレ或ハ招魂社ヲ建テサセ給フ原因トナリシコト、思ハルレバ此處ニ舊津和野藩士龜井家ノ舊記ヲ抄出シテ其首唱ノ功ヲ顯揚セムトス。」

文久二戌十二月二十四日京都參集ノ正義ノ士、靈山ノ靈明舍ニ相會シテ報國忠士ノ靈魂祭禮有之、其祭事ヲ執行セシモノ及ビ當日參集ノ人名左ノ通リ、祭主古川美濃守源躬行（江戸頭取）　會頭福羽文三郎源美靜（津和野）　世良孫槌世良利貞（長州）　西川善六（江州八幡）　長尾郁三郎平武雄（京）

（編者云、來會人名木村數馬以下六十一名ノ姓名ハ略ス）

祝詞

言欲モ畏支天下大政乎鳥啣吾孀臣大城爾執申給比已諸藝船等御國乃海部近久寄來奴跡喚疾久逐遣比擊碎久定在志乎此二十年許前爾其乃寄來幸船乃事情乎問訊已古曾討モ逐モ爲斗議氐鹽沫乃凝留遠域仁此事乎自告遣以來去嘉永六年水溜留阿米利加國乃夷船通商乎欲乞止氐、犯禁已江戶品川海爾乘入奴留乎執事等西洋夷族波志モ火技爾優奴留由爾甚久聞協氐呆惑作失途方不法乎咎モ不爲　朝廷爾モ不申氐渠等乃隨言通商波更也和親阯仁爲許可波甚毋口惜支事奈利氣利無間又別國々モ次々爾參來奴留乎執事屬猶相混利相口會氐追攘幸者聖旨不思在皆爲許可氐介里交易疾久錯其方氐不規在婆物產爲闕耗上下最困弊利夷賊等波所得而立進退

乍　大祓詞乎凌辱輕侮米奉留事乃多在婆髮立切齒止毋憤怒胸塞斗毋無眞詞奈牟
朝廷波素與里夷狄乎欲逐放乃御心掟不動婆就中心猛支壯鞏山行者草堅屍海行
者水漬屍　大君乃爲米仁死米止思定米天大御心乎爲心而勤勞乍或波衆罪或波自
殺氐死王事人自安政五年間至今爾幾百人在耳牟或波三月雪爾吟行比或波正月望
爾契友比志類乃忠士輩乎於　朝廷毛哀爾甚惜美思食在波此人等乃武久清久雄久
明支御靈乎同社爾鎭齋國忠仁報伊　皇基乃鎭護斗毋欲爲止同志諸人毛疾久思立
波躬行伊　殿下爾此事乎爲建白登毛未事成月日經乎思詫曰今日乃生日乃足日爾
同志人々乎集會旦先爲靈祭米靈魂爾此由乎毋告申左米止旦斯物爲爾古曾請忠義
諸君乃和魂荒魂知毛不知毛無洩事無脫事此祭庭爾天駈來會坐旦同志諸人酒飯山
海乃多米津物乎捧而敬仰狀乎平久安久聞給旦和魂波　朝廷乎守幸閇旦諸司百官
忠誠爾國郡領主等邪穢心不令在荒魂波蠶行橫濱奈留夷賊波更奈利若軍艦乃寄來
牟波討罰女千里乃波濤爾逐沈米旦魂幸布神祇鉾造乃此大八洲國乎如本蹉高貴宇
宙爾徹底留强國止成給閇止同志諸人等如自夷狄紛擾國々所々領主　皇城爾集來旦奏事乍
辭別旦白左久禍福如繩斗諺事如奈留波喜悅登毋詔波更奈利斯在爾取旦波　大御國
朝威毛漸々爾榮坐留景狀奈留乎年久爾神祇官乃絕奴留波大闕典久憂苦
波志毋以神事旦爲先給布大御風法奈留乎

事乃限在波先此官欲興立而躬行雖惰弱東都爾參上旦　殿下爾建言之其國主乃執
權等爾毛事計聽抒毋未事整古曾心憂計聽抑忠誠士乃靈魂伊吾願事爾靈合而如思
疾久此事乎令成就與止祈請乍畏介其久南靈多麻毛阿波禮登於茂閇玖遍遍當米和
賀億布介那久都久須巨々露乎、

文久二年十二月二十四日　　美濃守從五位下源朝臣躬行

（文久三年七月弔慰祭主唱者祭神名同祝詞（福羽子爵家藏）（主唱者）多胡眞强（編者云、通稱兒ナリ、又光晉ト云ヲ同藩士、牧村三香（編者云、通稱波津和野モ云ヲ同藩士、石河正養（編者云、後ニ幸夫ト稱ス同藩士、大谷秀實（編者云、通稱左衛門同藩士、山本孟寛（編者云、後ニ楚樹ト稱ス同藩士、森岡通雄（編者云、通稱才二郎同藩士、岡恒城（編者云、同藩内鹿足郡木部郷八幡宮神職ナリ、庄福羽美靜（故子爵）加藤遠（編者云、初名芝順藩醫、桑本正明（編者云、通稱才二郎同藩士、

（祭神名）

佐禰津武之大臣命三條實美右大臣　奈理安紀良之大命水府藩大納言

（編者云、以下六十四人ノ祭神名略ス、）

祝詞

八十日波雖在今日乃生日乃足日爾掛卷毛恐支報國忠志乃神靈能大前爾今頑愚奈
留何某等奉奠大御食波可愛青人草乃取作能長田乃稻乎搗飯乃御食爾作黒狹田
乃稻乎神酒爾醸之大御肴波青海原爾住留鰭乃狹物野山爾熟ク醴留木實菓子奈止取

賄比奉備里大御心乎和志米奉利大前爾申左久　神靈毛知食如久年月久爾御志乎
仰支慕比御靈乃幸乎祈留毛海往者水濱骨山往者草生骨登　皇國乃御爲爾身命乎
拋給閇留御魂乃御恩賴爾依留事爾豆旅乃宿乃小床爾毛齋祀天朝夕御靈乃幸乎祈
申乎本與利如此廣大奈留御功績阿留　神靈波從　公御祭祀毛有奴部支例奈禮抒
大御心爾不任給故有巨加毛其議未開乎待衆而此祇園乃御境內乎買求米小支御
社乎齋立巨祓所神達仁申巨荒鹽乃和鹽乎以巨祓清米巨三條贈右大臣實萬公神靈
水戶贈大納言齊昭公神靈乎始止志次々身罷給比志年月日迄毛知有乎婆　御靈代
爾悉爾書記之御名而已知有乎婆御名能美乎記之我曹我今迄聞傳多留限而已乎齋
祀禮抒猶己等我狹支心爾波不聞知留　神靈毛多爾坐武乎其波自今次第仁聞知隨
爾　御靈代爾齋附巨齋祀留波勿論奈禮抒猶不至隈多爾侍眞幸乎其波睦魂相神靈
達神議爾議給比神集仁集比給比巨如此奉獻奉齋留此有狀乎平介久安介久聞食志
巨今殊更仁申毛甚頑愚爾恐介禮抒　天皇朝廷乃　叡慮乃如久國々乃大城乃君波
申毛更仁天下四方國邊山乃奥野乃壁乃民草迄毛雄心振起志巨夷賊等乎討拂布精
神彌進爾進往留久將今頑愚奈留我曹毛　皇國乃御爲爾肝膽碎不熟寢不飽食如斯
奉仕有樣乎平介久安介久聞食巨垣磐爾常磐爾夜守日守仁守幸閇給閇止恐美恐美
毛申

辭別巨申如斯稱辭申言毛事毛今恐奈留我等奈禮婆　大御心爾背逆眞幸事毛侍眞
幸乎其波神習多留心隨毛青人草習留事止御靈神乃廣久妙奈留　大御心爾見直志
聞直志平介久安介久聞食止申

《明治元年四月二十八日東海道總督府ヨリ先鋒各藩へ達》　處々戰場討死幷陣中病死之者一同招魂祭被成下之旨大總督宮御沙汰候條厚思召之段各藩隊長ヨリ其子弟へ可申通樣總督府被仰出候事

〔編者云、大總督宮ハ四月八日駿府ヲ發セラレ、四月十五日江戶ニ御著增上寺ニ入ラセラレ、四月二十一日江戶城ニ入リ給ヘリ、コノ達ハ江戶城ニテノ御發布ナリ、〕

《明治元年五月二十八日大總督府下參謀達》　追々兩野總房武奥州之倘所ニテ合戰或ハ深手ニテ療養中死去致候輩諸藩ニ不洩樣明二十九日限リ可申出旨被仰出候事

但僕隷之者モ可申出事

〔編者云、コノ御沙汰ハ尾州藩、長州藩、伊州藩、佐土原藩、大村藩、吉田藩、橫須賀藩、津和野藩、池田藩、秋田藩、水戶藩及ビ會計局御守衛大砲隊、赤心隊、報國隊、苔龍隊ニ下サレシナリ、〕

（明治元年戊辰六月朔日大總督府布告）今般兩野總房武奥州數個所ニヲ致戰死候輩明二日巳之刻御城内於大廣間〇（編者云、江戸招魂祭被仰出候條諸藩隊長司令士登城拜禮被仰出候事

（編者云、コノ布告一書ニハ五月二十八日ノ御達ニヲ來月二日トアリ）

（明治元年六月關東鎭臺日誌第一拔抄）六月二日諸道戰死之者招魂合祭於大廣間修行其式如左

其日ノ平旦祭主祝部及諸司等先出殿後取等ヲシテ諸席ヲ定メ簀蔗ヲ敷カシム、辰ノ刻先祓ヲ脩ス、畢テ介添靈床ニ神靈ヲ居、榊ノ小枝ヲサシ假ノ神籬ヲ造ル、造リ畢レハ祭主座ヲ立テ靈床ノ前ニ向ヒ、微音ニ招魂ノ祝詞ヲノブ、招魂ノヲケ畢レバ後取笏ヲ打ツ兩段、大總督宮次ニ公卿諸侯方進ンデ殿ノ北方ノ上殿ニ列座シ給フ、神事總裁ハ一ノ間ノ北ノ端ニ著シ、祭式係ノ人々並ビニ書記ハ二ノ間ノ北方ニ座ス、祭主介添ハ向ヒテ南方ニ座ス、各藩ノ隊長司令士等三ノ間ニ群集ス、樂人ハ一ノ間入側ニ坐シ、其餘下參謀軍監等之人々南北カタカタニ分レテ列坐セリ、座定リテ後祝部一人玉串ヲトリテ介添ニ渡ス、介添轉ジ取テ直チニ靈床ニ向ヒ奉幣ス、捧畢テ樂人樂ヲ起ス祝部等入側ニ順立シテ供物ヲ轉進ス、奉幣ノ儀ノ如シ、捧畢テ祝部等二ノ間ノ入側ニ列座ス、樂人樂ヲ止ム、總裁令旨ヲ捧ケテ祭主ニ渡シ給フ、祭主進ンデ令旨ヲ拜戴シ、直チニ進ンデ靈床ノ前ニ立チ高聲ニ令旨ヲ宣ブ、畢テ令旨ハ傍ノ臺上ニ居、本座ニ著ス、畢テ大總督宮御座ヲ立タマヒ、靈床ノ前ニ向ヒ再拜拍手シタマフ、次ニ三條左大將以下公卿方順次ニ席ヲ立テ再拜シタマフ、畢テ各藩ノ隊長司令士等二ノ間ニ進ンデ靈床ヲ拜シ、又大總督宮ヲ拜ス、兼拜シ畢テ本座ニ就ク、大總督宮公卿方皆退入シ給フ、總裁獨リ本座ニ在リ、祝部等座ヲ立テ前ノ如ク順立ス、樂人又樂ヲ起ス、供物ヲ撤スルコト獻ズル儀ノ如シ、撤シ了レバ樂人樂ヲ止ム、後取笏ヲ打ツコト兩段、祭主介添立テ退入ス、儀式畢テ後改メテ各藩隊長退入、樂人亦立テ退入ス、儀式畢テ後改メテ各藩隊長並司令士ヲ列坐セシメ、神酒乾魚ノ供物ヲ賜フ、祝部後取ノ奉此儀ヲ掌ル、各藩人退出ス、祭主マタ靈床ノ前ニ向ヒ、微音ニ送靈ノ祝詞ヲ述ブ、此儀畢テ總裁退出シ祭式係ノ人、自餘ノ諸士悉ク退散ス、然シテ後祝部等マタ退出ス」

祭文

懸巻毛恐伎　令旨乎以宣波久　天皇我大命爾坐宣波久鶏我啼吾嬬乃國爾不奉仕不禮慶喜我罪乎問波止毛　大總督並爾道々乃軍乃總督爾任志賜比日月乃　大御旗乎降志給比將士乎依志賜倍循倍留　皇御軍波委手奴身毛棚不知勇美健耳比山往婆艸生屍登荒山乃嶮嵓支坂毛駒乃爪岩根左具久美海往婆水濱屍止八重浪乃逆巻灌毛大船仁眞楫繁貫進美仁進米婆梓弓射向布者无久武藏野乃原乃薄

乃吹風爾廉我如久其魁首慶喜波曇面恐美恐禮巳畢仁伏奴婆江戸乃大城爾入之加道不知醜乃奴乃五月蠅成騒競巳大雪乃亂留々如久浮雲乃散ア〻久留如久東乃國諸乃道此處乃限彼處乃岳仁屯美集比巳尚巳更仁御軍乎班遣志彼乃山乃曾岐此河々乃 御軍乃中爾命過奴留人等有利止聞食巳悔志備賜比和備給比巳宜賜波久恐支將士等乃身毛棚不知伊曾志美仕奉志爾依巳如此大支那留業波成志得志物止歎比勇美御座々都毛々今將士等乃命過奴留事乎所思食婆古借楠乃安曾我國乃爲爾仕奉之勢爾毛並備奴倍久思保之米之都々歎賜比悲賜比御音哭加志賜波久宜

又 宣波久恐支臣等乃如此身乎捨巳勞支仕奉禮留事乎婆朝夕夜晝止无久歎賜比悲美賜比辛美痛美御座麻爾須依巳伊加泥其魂乃往方乎後輕久心毛安穩爾思比安息麻留倍久慰米賜比治米賜止爲巳此殿内乎假乃靈床止祝定米神籬指榮志備奉留物波青海原爾住物波鰭乃廣物鰭乃狹物大野乃原爾生留物波甘菜辛菜毛乃和物毛乃荒物爾至麻巳如横山雜取備倍此千代田乃片山仁生立留五百枝榮木乎折取巳明和幣照和幣乎取付宇頭乃太玉串止持添巳備賜布大御幣帛乎足幣帛乃豐幣帛登請給利巳今日乃此御行事乃床爾招奉多留兵士乃幸御魂奇御魂天翔利國翔利 天皇我御代乎婆常磐爾堅磐爾守夏比幸波比奉仕留臣等乎始巳此大城爾集比侍夏奉 御軍乃内爾毛喪无久事无久平久安久彌勤米仁勤米彌猛巳爾猛婆志止米宣給布 令旨乎宣留

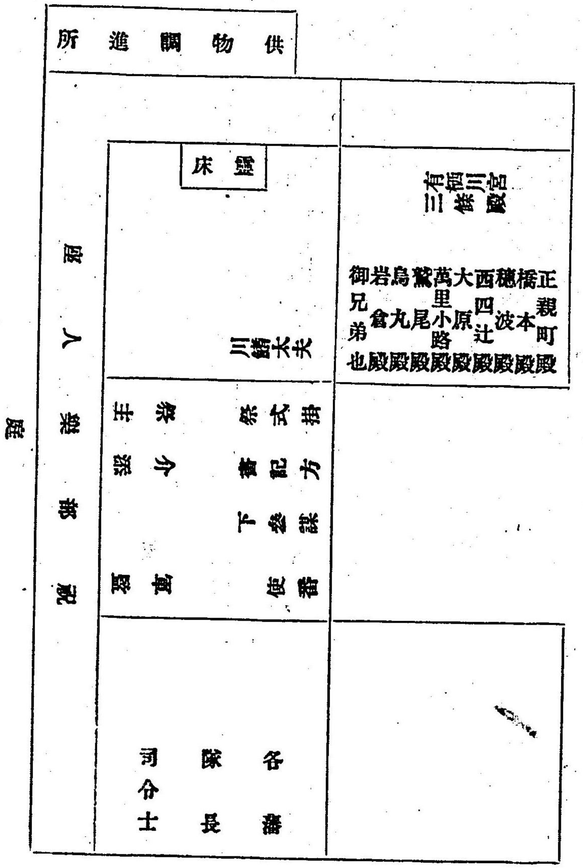
〔編者云、コノ祭文案ハ令旨ヲ體シテ齋主大久保氏コレヲ卿案シ、後ニ三條公ノ自ラ修正加筆セラレシモノヽヨシニテ、ゾノ草案今、大久保男爵ノ家ニ存セリト云フ〕

《六月二日於西九大廣間執行招魂祭々員以下人名第一局記錄》 ●祭式御用掛 河鍋太夫 ●祭式掛 渡邊清左衛門右隊アルニヨリ河田清之丞相勤、 ●記錄掛書記方錦織内記 ●祭主 大久保初太郎編者云、報國隊ニテ現今陸軍大將男爵大久保春野氏ナリ、介添 桑原眞清編者云、報國隊 ●祝部 新宮靭負 宮崎機部 杉本平馬 大橋治部 山崎冨丸 ●後取 松本賴母 渡邊平助 ●音樂方 杉浦大學外ニ筑後藩貳人

〔編者云、桑原楯雄氏ノ報告書ニハ祝部以下ノ姓名異同アリ、左ニ之ヲ掲ゲテ參照ス〕

●祭典掛齋主 大久保初太郎 介添 桑原眞清 池田庄三郎 鷹森茂 冨士亦八郎 ●神饌掛獻膳長 山本金木 ●手長 山崎冨丸 木野利兵衛 辻村駿河 大橋治部 鈴木楯雄 ●音樂掛 杉浦大學 池田庄二郎 松本賴母外ニ久留米藩二人

《明治元年六月二日城内於大廣間招魂祭參集圖》



《明治元年五月十日布告（癸丑以來殉難者ノ件）》大政御一新之折柄賞罰ヲ正シ節義ヲ表ハシ天下ノ人心ヲ興起被遊度既ニ豐太閤補中將ノ精忠英邁御追賞被仰出候就テハ癸丑以來唱義精忠天下ニ魁シテ國事ニ斃レ候諸子及葬有志ノ輩冤枉罹禍者不少此等ノ所爲親子ノ恩愛ヲ捨テ世襲ノ祿ニ離レ墳墓ノ地ヲ去リ櫛風沐雨四方ニ潛行シ專ラ舊幕府ノ失職ヲ憤怒シ死ヲ以テ哀訴或ハ縉紳家ヲ鼓舞シ或ハ諸侯門ニ說得シテ出汝顯晦不厭万苦竟ニ拋身命候者全ク名義ヲ明カニシ皇運ヲ挽回セントノ至情ヨリ盡力スル所其志實ニ可嘉尙況ヤ國家ニ有大勳勞者乎カ湮滅ニ忍ブヘケムヤト被歎思食候依之其志操ヲ天下ニ表ハシ其忠魂ヲ被慰度今般東山ノ佳域ニ祠宇ヲ設ケ右等ノ靈魂ヲ永ク合祀可被致旨被仰出候猶天下ノ衆庶益節義ヲ貴ヒ奮勵致ス可キ樣御沙汰候事

《明治元年五月十日布告》當春伏見戰爭以來引續キ東征各地ノ討伐ニ於テ忠奮戰死候者日夜山川ヲ跋涉シ風雨ニ暴露シ千辛萬苦邦家之爲ニ終ニ殞命候段深ク不便ニ被思召候最其忠敢義烈實ニ士道ノ標準タルヲ以テ叡感ノ餘此度東山（京都）ニ於テ新タニ一社ヲ御建立永ク其靈魂ヲ祭祀候樣被仰出候尙向后王事ニ身ヲ殞シ候輩速ニ合祀可被爲在候間天下一同此旨ヲ奉戴シ益可抽忠節且戰死之者等其藩主ニ於テモ厚ク御旨意ヲ可奉體認旨被仰出候事

（編者云、八年一月正院達ニ依レバ、此時ニ嘉永癸丑以來ノ靈ヲモ合祀セラレタルナリ、同達書ハ祭神ノ項ニ掲載セリ見ルベシ）

《明治元年五月二十四日達》戊午〇編者云、戊午ハ安政五年ナルベシ以來國難ニ殉候靈魂祭祀可被爲在旨兼而被仰出置候處〇編者云、此官令未見出サズ今般差シ掛リ當正月以來奉朝命奮戰死亡ノ輩祭典被仰出候間番々ニ於テ一々取調來ル六月十日迄兵士死亡ノ月日姓名等相認神祇官ヘ差出候樣被仰出候事

《明治元年七月七日御沙汰》當春以來征東奮戰忠死ノ靈來ル十日十一日兩日於河東操練場〇編者云、京都祭典式被仰出候事　右ニ付十日巳ノ刻ヨリ申ノ刻迄十一日辰ノ刻ヨリ未ノ刻迄ノ內諸官員參詣可爲勝手事　右刻限ノ內諸人參拜差許候事有志ノ輩詩歌ヲ供シ且ツ兵隊操練式等慰靈魂候義可爲勝手事　但シ靈前詰ノ者ヘ夫々相斷不及混雜樣可致候且從朝廷御祭典金下賜候得者地方ヨリ料物奉納ノ義被止候事

《明治元年十月御沙汰》畠山上總助　日下部上野介　佐々木伊賀守　佐藤土佐守
此度於當地招魂祭被爲取行候ニ付各藩差上候香資被下賜候ニ付萬々歲祭典擧行候樣御沙汰候事

《明治元年十一月三日出兵諸藩ヘ御布令》春來奉朝命奮戰死亡之輩招魂祭奠式被爲行候間番々ニ於テ委詳取調兵士死亡之月日姓名等相認來二十五日迄東京神祇官ヘ差出樣被仰出候事

《明治元年十一月八日御沙汰書》春來征東ニ付忠奮戰死之輩招魂祭奠式被爲在候間番々ニ於テ死亡士ノ姓名月日等詳ニ取調來ル二十五日迄ニ神祇官ヘ差出候樣被仰出候事

（編者云、コノ御沙汰書ハ上條十一月三日付ノ御布令ト精粗アルノミニテ同一事タリ、思フニ上條ニ東京神祇官トアリ、下條ハ、京都ニ於テノ御沙汰ナルベキカ、暫ク附シテ參考ニ供ス、）

《明治二年六月十日達》近々招魂祭被行候ニ付昨春來爲追討出兵之諸藩戰死屆之儀未相濟向モ有之候ハヽ急々取調神祇官ヘ可屆出候事

《明治二年六月十二日通達》今般招魂場ノ儀九段坂上三番町元歩兵屯所跡ヘ御取建相成候ニ付右場所見分ノ爲メ左ノ面々被相越候事　大村益次郎　香川敬三　船越洋之助　增田虎之助　佐藤嘉七郎　松岡新七郎

（編者云、大村氏ハ大村子爵（德敏）ノ先々代ニシテ本社創立ノ功著大ナリ、其傳、世ノ知ル所略之、香川氏ハ水戸藩ニテ現今伯爵、船越氏ハ廣島藩ニテ現今男爵、增

田氏ハ佐賀藩士ニシテ初メ海軍掛トナリ、後、兵部大丞ニ進ム、佐藤氏ハ後、名ヲ金義ト改ム、名古屋藩士ニシテ初メ大總督宮ニ仕ヘ軍務官御用掛頭取、又ハ兵部大錄軍醫寮權助等ニ歷仕ス、松岡氏ハ名、重信、水戸藩士ニシテ大村氏ニ知ラレ兵部中錄ヨリ權大錄ニ至ル、招魂社御用掛トシテ出張シ(今ノ僧行社ノ地ニ御用掛出張所ヲ置カレシナリ)社務ヲ監督シ其創立ニ於ケル盡策ノ功少カラザルナリ)

(明治二年六月十三日軍務官ヨリ行政官ヘ差出書) 甲印ハ即今小社ナリトモ相營ミ今年祭禮取行候事、乙印ハ梅園、丁印ハ本社其他　乙丙丁ノ三ツハ即今手ヲ付候譯ニハ無之漸々年ヲ經テ取行候事

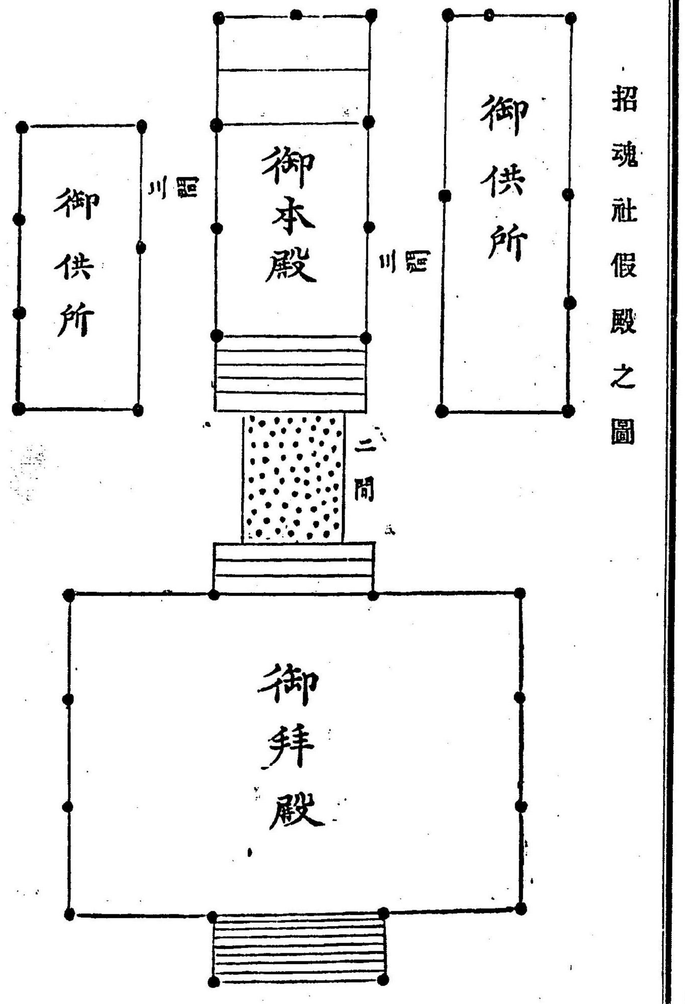
(編者云、コノ圖略ス)

(招魂社沿革記抜萃) 明治二年六月十九日招魂場小社建設ノ地東京府ヨリ受取候事　但社建設地ノ外園込ノ場所共同日棒杭建置候事

(記錄抜抄明治二年六月十九日) 招魂社地ノ儀ニ付大村、佐藤、松岡、其他作業方兩人並大工召具シ檢地爲取檜圖面之通假圖朱引之所ヨリ九段坂之方假建取究相成候事

(記錄抜抄明治二年六月二十二日) 來ル二十八日ヨリ招魂祭取行ニ付左ノ繪圖面ノ通リ右日限以前ニ出來ノ筈取究相成候事

招魂社假殿之圖



《明治二年六月二十三日軍務官ヨリ東京滯在ノ諸藩ヘノ布達》來ル二十九日ヨリ五日ノ間於九段坂上招魂場昨年來戰死候者右祭典被爲行候仍相達候事　但シ招魂祠ヘ供物等奉納致度者ハ御許容相成候間來ル二十七日迄ニ當官ヘ可申出候事

一祭事順序　初日祝砲　勅使御差立相成候事　第二日三日四日ノ間角力奉納ノ事　但雨天之節ハ日送之事　第五日晝夜花火奉納之事　但右同斷

《明治二年六月二十四日布告》來ル二十八日ヨリ招魂祭被爲行候筈ニ候處右同日神祇官ヘ行幸ニツキ同二十九日ヨリ右祭禮被爲行候旨尙又諸官並諸侯ヘモ布告ニ及候事

《明治二年六月二十九日布告》招魂社ヲ東京九段坂上ニ營ミ戊辰以來戰死ノ士ヲ祭ル

《明治二年六月軍務官達》今般招魂祭被爲行候ニ付テハ初日祝砲奉納相成候處諸藩滯京ノ兵隊祝砲並花火獻納致度者ハ來二十六日迄ニ當官ヘ可申出候事

《明治二年六月二十九日儀祭式並祝詞》六月二十八日申下刻脩清祓本殿內外及祭事關係ノ輩ヲ清ム、同夜丑剋ニ靈招式ヲ脩ム、同二十九日平旦祝部等後取ヲ率テ齋場ニ入リ後取ヲ爲テ諸席ヲ定メ簀薦ヲ敷カシム、辰ノ剋先知官事宮前殿ニ着座シ給フ、次ニ副知官事華族及諸官ノ人々列座シ各藩ノ人等參集ス、座定テ祝部進テ靈床ノ下段ノ傍ニ着座ス、後取等ハ神饌舍ト神殿トノ間ノ庭上ニ順立ス、次ニ節ヲ打ツコト兩段、樂人樂所ニ於テ樂ヲ起ス、後取等神酒ヲ役送シテ祝部ニ付ス、祝部取テ神前ニ獻ス、次ニ神饌ヲ辨進スルコト神酒ノ儀ノ如シ、畢テ樂人樂ヲ止ム、祝部等神饌舍ニ退出ス、次ニ節ヲ打ツコト兩段、副知官事進デ本殿ノ下段ニ着座ス、勅使直チニ入テ神前ニ向ヒテ立給フ、副知官事膝行シテ勅幣ヲ取テ捧ク、勅使奉幣シ副知官事ニ授ケ給フ、拜請シ膝行シテ神前ニ納ム、畢テ勅使退出シ給フ、次ニ知官事宮神前ニ入テ再拜拍手シテ本座ニ復シ給フ、華族及ビ諸官ノ人々次ニ隨テ階下ニ拜ス、畢テ祝砲ヲ發スルコト幾聲畢テ樂人樂ヲ起ス、祝部等供物ヲ撤スルコト獻儀ノ如シ、樂人樂ヲ止ム、知官事宮退出シ給フ、華族及諸官ノ人々退出ス、此ニ至テ乘皆退出ス、同三十日祝部等神酒饌及海山野ノ物奉リ太玉串ヲ捧グ祝詞ヲ讀ム、又相撲ノ享アリ、七月朔日前日ニ同ジ、同二日前日ニ同ジ、同三日獻儀前日ニ同ジ晝夜花火ノ享アリ、此ニ至テ祭儀全ク畢ル、

勅使參向儀

七字號砲二聲、右ヨリ牢字過テ勅使宮中ヲ發ス、九段ニ至ル頃奉迎スベシ、先假座ニ入リ次ニ神殿ニ至ル、次ニ拜、勅使ヨリ少シク先キ奉幣使來ル、（御使番軍務官出

張ノ人是ヲ請取神殿ニ捧ゲ、勅使拝スル例祭儀主宰ノ者是ヲ取リ勅使ニ渡ス、勅使拝ス、終ヲ又舊ヲ祭事主宰ニ渡ス、請取リ是ヲ神殿ニ納ム、次ニ勅使退出、

祝詞

天皇乃大御詔爾因利豆軍務知官事宮嘉彰白左久去年乃伏見乃役與里始豆今年筥館乃役爾至麻傳國々所々乃戰場爾立豆海行者水付屍山行者草生屍頼爾波矢波立止毛背爾波矢波不立止言立豆身毛棚不知仕奉志將士乃中爾命遂奉留毛多幸利止所聞食豆其人等乃健久雄志久丹心持豆仕奉志爾依豆許曾如此速爾賊等乎服閉果豆世毛平氣久治利奴禮專其禮我功叙止哀美偲比此清所爾宮柱太敷立御酒者噎乃逸高知噎乃腹滿並豆海山乃物乎横山成積足波之豆稱辭竟奉留大幣乎安幣乃足幣止所聞食豆　皇御孫命乃大御世乎常磐爾堅磐爾守奉里幸奉里百官人等乎始豆國々乃宰爾至麻傳已我向々不令在彌進々彌勤々仕奉志米賜倍止白須

《明治二年七月六日記錄》招魂社御供物昨年來ヨリ戰死有之候番々呼出左之通被下候　但御禮之儀ハ於當所受候罷出候公儀人ヘ御神酒並壽留女被下候事　經節

五本餅一切宛、島津宰相、毛利宰相中將山內中納言、經節三本餅一切宛、池田中納言、池田少將、井伊中將、戶澤中務大輔、戶田采女正、戶田土佐守、藤堂中將、津輕少將、鍋島肥前守、黑田少將、前田宰相中將、淺野中納言、秋本但馬守、佐竹中將、眞田信濃守、榊原侍從、溝口伯耆守、島津淡路守、毛利左京亮、朝陽艦、經節二本餅一切宛、六郷兵庫頭、細川中將、德川三位中將、德川少將、織田書記、大村丹後守、大關美作守、大田原飛彈守、前田淡路守、松浦肥前守、松平伊賀守、松平越前守、牧野金九、秋月長門守、阿部主計頭、有馬中將、吉川駿河守、毛利淡路守、松前勝千代、鍋三枚餅壹切宛、池田相摸守、生駒讃岐守、井伊右京亮、堀長門守、本多乙次郎、小笠原豐千代、九立花少將、大給縫殿頭、松平主殿頭、有馬兵庫頭、佐竹壹岐守、土井能登守、伏水隊、甲鐵艦、春日艦、御親兵、鍋壹枚餅一切宛、池田攝津守、生駒旬之助、市橋下總守、蜂須賀中納言、仁賀保孫九郎、仁賀保佐五郎、堀美濃守、堀田相摸守、堀田攝津守、戶田淡路守、烏居丹波守、戶田長門守、加藤遠江守、納言、戶田丹波守、德川中納言、吉井左兵衛督、內藤志摩守、內藤若狹守、中山備中守、奧平美作守、大久保中務少輔、大河內刑部大輔、朽木近江守、山內薫、松平主稅頭、牧野伊勢守、松平攝津守、松平篤之助、松下嘉兵衛、相良遠江守、酒井前少將、木下備中守、一柳因幡守、森對馬守、飛龍艦、總計九十三、

《明治二年七月十日記錄》一左之輩ヘ招魂社祭事之節樂奏シ候ニ付目錄之通被下置、金三百正宛、長門守事東儀從四位、下野介事辻正六位、大兵衛尉事多正六位、長門守侍東儀正六位、伊豫守事東儀從五位、下野介事辻正六位、大兵衛尉事多正六位、伊豫守侍東儀正六位、以上

《明治二年七月十二日記錄》一左之通夫々被下之　神務金拾兩宛、白麻一反宛、大久保縫之助、桑原虎次郎　同金三千正宛、賀茂水穗、西尾棟、淺羽帶刀、內藤內匠、植松

伊織、植村新之助　同金弐千疋宛、松浦治郎左衛門、宮田十郎左衛門、辻村駿河　御用掛金拾両宛、佐藤嘉七郎、松岡新七郎、筆役金弐千疋藤林共助　作事方金二千疋宛吉富晉之助吉田十藏、岩島角五郎、渥見陽介、増田稻司、川島力之助以上

（官祭招魂社人名臺帳抜萃）

京都愛宕靈山招魂社　創立明治元年七月　祭神數二百二十五柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治二年三月　祭神數十柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治二年九月　祭神數二十五柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治三年六月　祭神數八十柱
京都北桑田辻招魂社　創立明治二年二月　祭神數七柱
京都紀伊福稻村招魂社　創立明治元年三月　祭神數九柱
京都愛宕今熊招魂社　創立明治元年十二月　祭神數三柱
兵庫朝來山口招魂社　創立明治元年正月　祭神數十七柱
長崎西彼杵長崎招魂社　創立明治七年　祭神數五百三十六柱
長崎北松浦平戸招魂社　創立明治二年二月　祭神數十六柱
新潟中蒲原寄居招魂社　創立明治元年十月　祭神數三百〇五柱
栃木那須黒羽田招魂社　創立明治二年十一月　祭神數二十四柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治元年七月　祭神數二百二十五柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治二年三月　祭神數十柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治二年九月　祭神數二十五柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治三年六月　祭神數百〇七柱
京都愛宕靈山招魂社　創立明治三年九月　祭神數十五柱
京　都　下　京招魂社　創立明治二年六月　祭神數四十九柱
京都紀伊福稻村招魂社　創立明治二年　祭神數四百四十五柱
大坂東成天王寺招魂社　創立明治二年八月　祭神數四十八柱
長崎西彼杵長崎招魂社　創立明治元年十二月　祭神數四十三柱
長崎東彼杵大村招魂社　創立明治元年二月　祭神數二十三柱
長崎東高來島原招魂社　創立明治二年九月　祭神數四柱
群馬邑樂館林招魂社　創立明治二年九月　祭神數三十九柱
栃木河内宇都宮招魂社　創立明治五年十一月　祭神數九十七柱
三重安濃藤方招魂社　創立明治二年十一月　祭神數三十七柱
滋賀滋賀膳所招魂社　創立明治三年一月　祭神數十四柱
岐阜安八大垣招魂社　創立明治四年一月　祭神數五十五柱
長野上高井須坂招魂社　創立明治二年十一月　祭神數七柱
長野北佐久岩村田招魂社　創立明治三年五月　祭神數二柱
岩手南岩手仁王招魂社　創立明治三年七月　祭神數十柱
山形最上十日町招魂社　創立明治二年八月　祭神數五十六柱
青森中津輕富田招魂社　創立明治三年七月　祭神數六十七柱
秋田由利矢島招魂社　創立明治二年四月　祭神數七柱
福井敦賀招魂社　創立明治三年九月　祭神數十二柱
石川金澤東御影招魂社　創立明治三年十二月　祭神數百〇八柱
岡山岡山招魂社　創立明治二年六月　祭神數五十五柱
廣島深津吉津招魂社　創立明治元年十二月　祭神數四十二柱
山口吉敷秋穂招魂社　創立慶應元年四月　祭神數二十九柱
山口吉敷吉敷招魂社　創立慶應二年十一月　祭神數十一柱
山口豐浦綾羅木招魂社　創立慶應元年十一月　祭神數一柱
愛知愛知廣路招魂社　創立明治二年九月　祭神數二十七柱
滋賀犬上彦根招魂社　創立明治九年六月　祭神數二十六柱
長野埴科清野招魂社　創立明治二年四月　祭神數五十二柱
長野小縣上田招魂社　創立明治三年三月　祭神數十一柱
福島信夫小山招魂社　創立明治元年十一月　祭神數四百十九柱
山　形　山　形招魂社　創立明治二年正月　祭神數二十六柱
山形東村山天童招魂社　創立明治四年三月　祭神數十四柱
秋　田　秋　田招魂社　創立明治二年八月　祭神數六百九十五柱
秋　田　本　庄招魂社　創立明治三年五月　祭神數六十六柱
福井大野篠坐招魂社　創立明治三年九月　祭神數十二柱
鳥　取　鳥　取招魂社　創立明治三年九月　祭神數七十六柱
廣　島　廣　島招魂社　創立明治元年五月　祭神數七十八柱
山口吉敷下字野令招魂社　創立元治元年十二月　祭神數一柱
山口吉敷小郡招魂社　創立慶應元年七月　祭神數九柱
山口吉敷宮野下招魂社　創立慶應三年五月　祭神數五柱
山口大島東久賀招魂社　創立慶應元年　祭神數二十柱

山口熊毛麻郷招魂社　創立慶應二年　祭神數十柱
山口熊毛室積招魂社　創立明治三年　祭神數七十九柱
山口都濃末武上招魂社　創立慶應三年　祭神數六柱
山口都濃湯野招魂社　創立慶應三年　祭神數八柱
山口都農富田招魂社　創立明治二年　祭神數十七柱
山口厚狹厚西招魂社　創立慶應二年十二月　祭神數六柱
山口厚狹中宇野招魂社　創立慶應二年十一月　祭神數二十二柱
山口厚狹舟木招魂社　創立慶應三年三月　祭神數六柱
山口厚狹奥萬倉招魂社　創立慶應三年十一月　祭神數二十七柱
山口縣佐波三田尻招魂社　創立慶應二年十月　祭神數五十三柱
山口赤間關新地招魂社　創立慶應元年五月　祭神數二百五十二柱
山口縣玖珂岩國招魂社　創立明治元年　祭神數二十二柱
山口阿武椿郷招魂社　創立明治元年　祭神數百六十八柱
山口縣阿武須佐招魂社　創立明治二年一月　祭神數十八柱
山口縣阿武郡萩招魂社　創立明治二年六月　祭神數四十三柱
高知長岡吸江招魂社　創立明治元年十一月　祭神數百〇五柱
福岡那珂馬出招魂社　創立明治元年十一月　祭神數百〇三柱
福岡那珂堅粕招魂社　創立明治元年十一月　祭神數四十一柱
福岡山門高畑招魂社　創立明治元年八月　祭神數九柱
福岡田川彦山招魂社　創立明治二年正月　祭神數十一柱
福岡仲津國作招魂社　創立明治五年三月　祭神數九十九柱
福岡御井山川招魂社　創立明治六年八月　祭神數百〇八柱
佐賀佐賀松原招魂社　創立明治三年　祭神數八十六柱
熊本熊本招魂社　創立明治二年二月　祭神數百六十六柱
宮崎那珂西方招魂社　創立明治元年十月　祭神數三柱
宮崎那珂下田島招魂社　創立明治三年二月　祭神數五十三柱
宮崎諸縣高鍋招魂社　創立明治元年　祭神數十一柱
宮崎諸縣宮丸招魂社　創立明治二年二月　祭神數十二柱
宮崎諸縣内山招魂社　創立明治三年十月　祭神數七柱
鹿兒島姶良加治木招魂社　創立明治二年十月　祭神數八柱
鹿兒島川邊東南方招魂社　創立明治二年正月　祭神數三柱
鹿兒島川邊加世田招魂社　創立明治二年三月　祭神數七柱
鹿兒島川邊川邊招魂社　創立明治三年四月　祭神數二柱
鹿兒島日置東市來招魂社　創立明治二年　祭神數十二柱
鹿兒島日置串木野招魂社　創立明治元年　祭神數七柱
鹿兒島日置中伊集院招魂社　創立明治七年七月　祭神數十一柱
鹿兒島阿多伊作招魂社　創立明治二年七月　祭神數二十三柱
鹿兒島給黎知覽招魂社　創立明治六年十月　祭神數三柱
鹿兒島出水西長島招魂社　創立明治元年七月　祭神數一柱
鹿兒島出水阿久根村招魂社　創立明治元年十二月　祭神數九柱
鹿兒島出水上出水招魂社　創立明治二年十月　祭神數十一柱
鹿兒島肝屬鹿屋招魂社　創立明治二年十月　祭神數十一柱
鹿兒島谷山谷山招魂社　創立明治四年十月　祭神數二柱
鹿兒島高城高城招魂社　創立明治四年二月十日　祭神數八柱
北海道函館汐見招魂社　創立明治二年八月　祭神數百五十五柱
北海道松前馬形上招魂社　創立明治二年十月　祭神數六十柱
北海道檜山江差招魂社　創立明治二年五月　祭神數九十二柱

〔編者云、コハ招魂社勅興當時ノ狀況ヲ知ラシメムトシテ掲グッ、以上合計百〇五社祭神數六千七百三十三柱アリ私祭招魂社ハ多クハ、明治十年以後ノ建設ナリ、現今官祭招魂社ノ祭神ニハ明治八年四月建ニヨリ一柱ニ對シ金貳拾五錢宛ノ祭祀料及金三十圓宛ノ修繕料トヲ國庫ヨリ下附セラルゝ〕

（明治二年十月二十七日若松縣へ達）昨年來其地出張ノ兵士戰歿之輩於其縣境墓年々招魂祭可執行事

名稱

本神社は初め招魂社と稱せしが草創に際して招魂祠、或は招魂場なども呼びしことあり。招魂場とは神靈を招ぐ齋場の名にして、招魂社又は招魂祠とは、其招ぎたる神靈を祭祀する祠社の謂なれば自ら區別あるなり。されば本神社には別に招魂場の設ありて神靈を合祀せんとする時は、必ず先づ其神靈を招魂場に招ぎ奉り、而して後神殿に遷して鎭祭するを例とす。然れども元來招魂社の稱號は、國家多端の際に起りし名にして、在天の神靈を一時招齋するのみなるやに聞えて、萬世不易神靈嚴在の社號としては妥當を失するかの嫌なきにあらず。茲に於てか明治十二年六月四日別格官幣社に列せらるゝと共に、靖國神社と改稱せられにき。靖國の字は春秋左氏傳に見えたりと雖も其意義は、祭神の偉勳に據りて國家を平和に統治し給ふの義なること、御祭文に「汝命等の赤き直き眞心を以て家を忘れ身を擲て各も各も身死りにし其大き高き勳功に依りて大皇國をば安國と知食すことぞと思ほし召すが故に靖國神社と改め稱へ別格官幣社と定め奉りて御幣帛奉り齋ひ奉らせ給ひ今より後彌遠永に怠事なく祭給はむとす」と宣らせ給へるが如し。それ我が帝國は古來平和を以て國是とすれば皇祖列聖安國と平らけく天の下を知食さむ事を軫念し給ひ、下民も亦聖旨を奉戴して、平和の爲めに一身を犧牲に供し、死しても猶ほ護國の神となりて、平和を格護せむことを期しつるなり。靖國の稱實に宜なりけり。

《舊記錄拔抄》明治二年六月十二日東京九段上ノ歩兵屯所跡ヘ招魂場設立云々、同月軍務官ヨリ諸藩ヘノ布達ニ來ル二十九日ヨリ五日ノ間於九段上招魂場昨年來戰死候者右祭典被爲行候仍相達候事○(但招魂ノ式ハ供物等奉納歌度者ハ御許容相成候間來二十七日迄ニ當官ヘ可申出候事)

同二年七月十二日兵部省○(此月軍務官ヲ改メ兵部省ヲ置ク)ヨリ辨官ヘノ伺ニ、中略今般招魂社御取立ニ付云々

《明治十二年五月六日第一局伺》招魂社々格竝神官ノ議ニ付キ昨十一年十二月中太政官ヘ再應御上申相成居候處方今御詮議相成居候歟已ニ過日御下問ノ趣モ有之就テハ近々社格御取極メ可相成然ル處當時招魂社ノ稱號タル一時在天ノ靈魂ヲ招キ神饌ノ享ヲ受ケシムルノ場所ヲ指シテ唱フルモノノ如クニシテ萬世不易ノ社號トニ不被存候間今般更ニ社號賜候樣別紙ノ通御上申相成度此段相伺候也

○(別紙上申書略之)五月二日指令伺之通

《明治十二年六月四日太政官達》東京招魂社ヲ靖國神社ト改稱別格官幣社ニ被列候此旨相達候事

《明治十二年六月二十五日社號改稱社格創定ノ御祭文》

天皇乃大命爾坐世此廣前爾式部助彙一等掌典正六位九岡尭爾乎使止爲旦告給波久止白左久掛卷毛畏支靖國知食志天皇乃御代與利天日嗣高御座乃業止知食來留食國天下乃政乃衰頽多留乎古爾復志給比明治元年止云年與利以降內外乃國乃荒振冦等乎刑罰米不服人乎言和志給布時爾汝命等乃赤支直支眞心乎以旦家乎忘禮身乎擲旦各毛死亡爾志其大支高支勳功爾依旦志大皇國乎安國止知食須事皆止思食須賀故爾靖國神社止改稱倍別格官幣社止定奉利旦御幣帛奉利齋奉旦世給比今與里後彌遠永爾忘留事无久祭給波牟止須故是乃狀乎告給波久止白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美毛白須

《明治十二年十一月六日例祭御祭文》

天皇乃大命爾坐世掛卷毛恐支靖國神社乃廣前爾式部寮六等出仕兼二等掌典從六位國司仙吉乎使止爲旦白給波久止白左久食國天下乃政乃衰頽多留乎古爾復志給比與利以降內外乃國乃荒振冦等乎刑罰女不服者等乎言和志給布時爾汝命等乃赤支直支心以旦家乎忘禮身乎擲旦各毛死亡爾志大支高支勳功爾依旦大皇國乎安國止知食須事止奈世思食須我故爾今年與利始米旦永支例止今日乃祭爾御幣帛奉利給布事乎聞食旦天皇乃大御代乎動久事無久佐夜具事無久彌益爾常石爾堅石爾守幸倍給倍止白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美毛白須

〔編者云、コハ御社號ヲ賜ヒヲ始メヲノ例祭御祭文ナレバ、特ニ本項ニ掲クルコトヽナセリ、〕

（日本書紀神武紀）昔伊弉諾尊目此國曰、日本者浦安國、（豊秋津洲）（豊秋津洲）（豊秋津洲）

八百六十八柱（○合祀祭を行ふ事三十六回、即明治二年六月より同四十三年五月に至る、）に上り神威燦として維れ輝き、餘光遠く異域に及び、外人の來朝するもの先づ、本神社に詣し和魂の鐘まる所、優越せる精神の標識として讃歎せざるはなし。而して祭神生前の官職身分等をいへば陸軍の所屬あり、海軍の所屬あり、維新前後の殉難死節の士あり、地方官警察官あり、公卿あり、藩主あり、士あり、卒あり、神職あり、僧侶あり、婦人あり、農工商あり、苟くも帝國臣民にして、叡慮を奉體して國家の爲めに忠節を抽んで、高潔なる大精神を發揮するに於て何ぞ貴賤上下の別あらむ、わが祭神のあらゆる階級職業の代表たるは勿論のことなりとす。（○明治三十一年より特別合祀の別あり、合祀祭の條に云ふべし、）

御靈代は神劍及神鏡にましまし、神劍は明治二年六月栗原筑前の鍛造し奉る所、神鏡は製作者未詳なれども明治元年六月舊江戸城大廣間招魂祭の時、神籬に奉懸せし靈鏡に坐せりとぞ、內殿の左右の靈床に副靈璽として官位姓名を列記せる卷物牒冊を奉安す、卷物は明治五年五月六日を以て始めて之を內陣に納め、爾來合祀祭の度毎に納められしが、明治三十八年第三十一回の合祀祭より之を牒冊に改められたり、而して別に一本を社務所に藏す、所謂祭神帳之なり、

○合祀年月別

回數	祭神幀番號	合祀年月	戰役（事項）	維新前後殉難者	右陸軍 左海軍	有陸軍々屬其他 左海軍々屬其他	計	合計
第一回	自第一號 至第六號	二年六月	伏見、鳥羽、函館	三、五八	一	一	一	一、五八
第二回	第七號	七年八月	佐賀	一	一	一	一	一

| | | |

| | | |

○維新前後殉難者職名別

職名	明治二年六月第一回合記	同二年五月第二回合記	同六年五月第三回合記	同七年十一月第四回合記	同廿一年五月第五回合記	同廿一年十一月第六回合記	同廿二年五月第七回合記	同廿二年十一月第八回合記	同廿五年十一月第九回合記	同廿六年十一月第十回合記	同廿七年五月第十一回合記	同廿一年十一月第十二回合記	同廿二年五月第十三回合記	小計
軍監													四	四
大監察													一	一
監察													二	二
下監察													一	一
長官													二	二
補助長官													二	二
元隊補助長官													二	二
御親兵補助長官	一													一

第廿四回	第二千二百十號至第二千二百廿四號	四十一年	同役ニ死役シ合記未濟ノ者（特記共）	一	一	一	一	一	一	一
第廿五回	自第二千二百廿五號至第二千二百廿七號	四十二年	韓國暴徒鎭壓事件ニ於テ死役シタル者	一	一	一	一	一	一	一
同	同	同	廿七八年戰役ニ從事シ傷痍疾病等ニ因リ死役シタル者（特記）	一	一	一	一	一	一	一
第廿六回	自第二千二百廿八號至第二千二百廿九號	四十三年	同上戰役ニ於テ死役シ合記未濟者（特記）	一	一	一	一	一	一	一
同	同	同	韓國暴徒鎭壓事件ニ從事シ死役シタル者	一	一	一	一	一	一	一

輔官	二
隊押任官	一
參謀	一
參謀附屬	一
軍監	三
軍監附屬	一
執政所監察	一
指揮役	一
中隊司令	一
令官	三
司令士	三
司令士副長	一
目監	一
小隊長司令士	一
小隊司令士	一
小隊長	二
元隊分隊長 四二	
分隊長	二
中大隊令官	二
中隊司令官	一

元中隊長	二
中隊長	三
軍事方	二
砲術役	一
大砲司令	一
大砲隊	一
大砲隊長	一
大砲隊士	三
大砲令士	一
大砲方	三
大砲方附屬	三
大砲隊員	一
器械頭人	二
器械方	二
器械持	一
砲隊器械係	一
小荷駄方	一
小荷駄手代	一
小荷駄手傳	一
輜重方	一

彈藥持	一
戰士組頭	一
戰士	一六
槍隊戰士	七
戰兵	九
前隊	一
直隊	四
御先導使名代	一
御親兵	三〇
御親兵定夫	三
隊號令官	五
隊長	一二
隊長子息	一
遊軍隊長	一
元隊長	五
隊別當	一
隊總括導	二
元隊員	一九三
隊員	九四
隊員附屬	二

隊士司令官	隊士	元隊諸役欠容	元隊諸駈引	隊伍長	隊士補助	元隊徴兵	隊書記會計方	在住隊	元隊小者	隊小者	隊工人	元隊夫卒	隊夫卒	隊厩者	隊厩卒	私兵	兵士	卒
一	七	一	一	一	二	四	五		四	五	一	一二	一	一	一	一	一二	二
																九		
									一九									

銃卒	銃手頭	銃手	卒	軍隊員	軍員	軍小者	軍夫卒	軍小使	農兵隊長	農兵司令	農兵	農夫卒	町兵隊長	町兵	雇使	雇小使	士官	士官助	下等士官
四七	一	一八	四		九	一	一	一	一	一	三二	六	一	二	一	一	一五	一	五

落船將	小頭	軍艦乘組	軍艦出納役	軍艦出納方相勤	運用方手傳	樂生	鼓手	稽古人	水夫小頭	水夫	一等水夫	二等水夫	三等水夫	火焚小頭助	火焚	二等火焚	一等火焚	三等火焚	砲臺奉行
一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	三	三	三	九	一	一	一	二	七	一

旗本行	勘定本行	勘定役見習	矢倉本行子息	家來	元家來	家來子息	家臣	家老	家従	家人	家奴	檢使	目付	步行目付	徒目付	小十人目付	與力	與力子弟	步行列與力
四	一	一	一	二八	一	一	二八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	三	一
				一															

宮御族下	留付附金方元緒	文庫役子息	郡方勤	郡方手代格二十分一役	郡方手代	金方手代	會計方附	小納戸	小普請	歩行格軍用掛懸役	歩行士	馬廻格勤定方勤子息	馬廻訓導	醫學館元緒	新番組頭	大番	書院番子弟	書院番
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五	一	一	一	二	一	一	二

持筒組	組員	書役	筆者	斥候長	斥候隊	斥候	探索方	士	陪從	從者	從者附添	使番	使番學校掛	使番家來	號卒	仲間	從僕	僕	旗持
四	一二	一	一	一	四	六	三	一	一	九	一	三	一	一	七		九	一	一
																		一	
																	二		
										一									

百姓	農	農子弟	醫師	寺侍	尼	僧侶	修驗	社人	神官	神職子息	神職	平民	卒族	士族	藩士	藩主	公卿	雜人	御用人足
二五		一	三			二	五			一	一				二七二			四	二
		二八										四		一七一	一四四三二	一	二		
						一四	一												
														一三	二				
二五	一	三九	二六	二	一	二三	二一	一	六一	一	一	一五	一三	一七一	五三六	一	二	四	二

猟師	商	商子弟	甲冑師	大工	鍛冶	相撲	田楽師	小山守	婦人	未詳	合計
三		一	一	一	一			一		一九二	三五八
										九	二
										一五八八	八〇
										七六二	二九六〇六
							二			一七	一八一四六〇
										二〇二七三	六二二七二
										三九	八〇
										一	一
一七	一	四五三〇	二	二	一	一	二	一	一	一七	二七二〇一

（編者云、軍夫ト云ヒ、兵夫ト云ヒ、神職ト云ヒ、神官ト云ヒ、其職名甚煩多ナリ。然レドモ、祭神帳ノマヽヲ記シテ、今、容易ニ改メズ、）

○佐賀、臺灣、朝鮮、熊本、山口、福岡並西南事件及竹橋事變ニ於ケル合祀者官職別

官職名		佐賀ノ役	臺灣ノ役	朝鮮事變	熊本、山口、福岡事變	西南事件	竹橋事變	計
少將								
肺	明治八年一月合祀 明治十年七月合祀	二月合祀			明治十年一月合祀 明治十年七月合祀	明治十年一月合祀 明治十年二月合祀 明治十年六月合祀 明治十年七月合祀 明治十年十一月合祀	明治十一年一月合祀	
	明治八年一月合祀 明治十年七月合祀 明治十八年七月合祀		明治十年一月合祀 明治十五年一月合祀 明治十八年五月合祀					
					明治十年一月合祀	明治十年一月合祀 明治十年二月合祀 明治十年六月合祀 明治十年七月合祀 明治十年十一月合祀		

| | | |

軍曹	同錄醫部補	步兵軍曹	軍曹心得	同錄醫部補	步兵生徒	伍長	同錄二等巡查	步兵伍長	准下士	下士心得	兵卒	一等兵卒	二等兵卒	步兵兵卒	同一等卒	同二等卒	生兵	喇叭長心得	喇叭一等卒
一						二五					一二三								
											六								
一						一													
一〇	一	一	三四四	三	一	一九	四〇四	一	三	一	四六四	一	一	一	一四	一	一	一	一
一一	一	一	三四四	三	一	一九	四〇四	一	三	一	四六四	一	一	一	一四	一	一	一	一

工兵卒	同騎兵卒	輜重兵々卒	會計三等書記	同二等看護卒	二等看護卒	看護卒	二等看病人	二十人長	軍夫	從者	厩夫	從僕	小使	傭夫	傭役夫	備	陸軍御用掛	同十二等出仕	同等外一等出仕
										五					一			一	
														一					

一等大醫部	二	二	二
同少醫部	五	五	五
二等中醫部	四	四	四
同少醫部	一一	一一	一一
三等大醫部	一	一	一
同中醫部	一	一	一
同少醫部	七	七	七
六等醫部	一	一	一
七等醫部	一	一	一
十等醫部	二	二	二
醫部補	四四	四四	四四
同心得	二二	二二	二二
同等外一等	一	一	一
同二等巡查	一	一	一
同三等巡查	一	一	一
一等巡查	一	一	一
二等巡查	二四	二四	二五
三等巡查	二四三	二四四	二四四
四等巡查	一七二	一七二	一七二
一等巡查心得	四	四	四

二等巡查心得	四	四	四
三等巡查心得	六	六	六
四等巡查心得	一九二	一九二	一九二
巡查屬	二	二	二
仕丁定屬	一	一	一
探偵下使	一	一	一
當分屬	一	一	一
一時屬	一	一	一
臨時屬	四	四	四
隊小隊長	一	一	一
隊士	六	六	六
隊員	五	五	五
斥候	一	一	一
彈藥方	一	一	一
雜役	七	七	七
屬書記	一	一	一
隊區長	二	二	二
同塗料區長	一	一	一
同分隊長戶長	一	一	一
同副戶長	一	一	一

○二十七八年及臺灣、朝鮮、三十三年事件、臺灣守備隊、三十七八年並韓國暴徒鎭壓事件ニ於ケル陸軍合祀者官職別

| 官職名 | 二十七八年戰役合記 | 二十八年十二月朝鮮ノ役合記 | 二十九年及臺灣朝鮮ノ役合記 | 三十朝鮮ノ役及臺灣戰役特記合記 | 三十朝鮮ノ役及臺灣戰役特記共記 | 三十守備隊二特記合記 | 三十三年事件ニ於ケル陸軍合祀者（ムク共記）

騎兵少佐	騎兵中尉	歩兵中尉	歩兵少尉	騎兵中尉
		一六		
		六		
	一	二五	二	一
		六		
			三	
			一	
			七	
			一	
			三	
			一	
			一	
			一

	歩兵特務曹長	騎兵特務曹長	砲兵特務曹長	砲兵上等工長	砲兵上等監護	工兵特務曹長	工兵上等工長	輜重兵特務曹長	見習士官	憲兵曹長	歩兵曹長	騎兵曹長	騎兵一等蹄鐵工長	砲兵曹長	砲兵火工曹長	砲兵一等鞍工長	砲兵一等木工長	砲兵一等鍛工長	砲兵一等蹄鐵工長	工兵曹長
五	五	二									五	一								
一	一									一	二	一								
四	四				一					二	一五	二			一					二
二	二		三							二	一	二								
一	一										二	一								
五	一九〇	一九六	三〇	四	二	二	四九													
二	二	五	八	二	二	三	三													
一	一	三	二	一	二	一	二													
二	二	三	一	二	一	一	一													
一	一	一	二	一	一	一	一													
二	二	二	二	一	一	一	一													
一	一	一	一

| 工兵一等軍曹 | 九 | | |

| | | |

代用馬卒	看病人	代用從卒	軍役夫	傭人	傭較工	傭靴工	馬丁	傭馬丁	工長	線路工夫長	機關長	機關手	司厨長	建築工夫長	線路工夫組頭	車輛檢查番	諸品番	鐵道作業局傭人
			一四	一				一										
	一		五					二										
	一七		四八	六			三											
	一三		二〇															
	一																	
	八							二										
	三																	
四																		
			一三	一														
			六〇															
			一四	二														
			二六	三														
			六	一														
			五															
			一三															
			九五	六														
			二	一														
			一三	三														
			一															
			一															
			一

野戰郵便脚夫	配達夫	郵便夫	船長	事務長	機關士	運轉士	(船)事務員	運轉士生徒	機關士生徒	水夫長	火夫長	水夫	賄長	火夫	大工	大工助手	荷物方	舵取	油差	司廚
三																				

電信工夫	電信准工夫	鐵道線路工夫	測量工夫	通信工夫	隧道工夫	土方職	測夫	工夫	掃除夫	注油夫	驛夫	舵夫	鍛冶工	煉瓦工	製纖工	組立工	木工	鐵工	傭木工
		一八				一													
三	三		三	五	九	三	七	四	八	四	二	二	一三		一	六	五	三五	三	六
																一	一	二		
二	一	二	一	三	五	九	三	七	四	八	四	二	二	一三	一	一	七	六	五五	二	一

車輛木工	傭路役工	建築大工	仕上工	轉轍手	臨時傭人	傭入船々長	同前長	同二等僕	地計
									一、三四五
									二三九
									一、二五二
									四一八
									三一、一二四三
									八七
									二八、九六六
									三六、八五八
									三五、八三一
					四	九	一	一	一、八五九
									七六一
									一四二
一	一	一	一	一					一〇〇、一一七

○二十七八年及臺灣、朝鮮、三十三年竝三十七八年事件ニ於ケル海軍合祀者官職別

中勝	官職名	
	二十七八年十二月合祀	戰役
	二十七八年十一月合祀	朝鮮ノ役戰役特旨ニ依リ及ビ其ノ共ニ合祀
	二十七八年十二月合祀	朝鮮ノ役戰役特旨ニ依リ及ビ其ノ共ニ合祀
	三十五年十月合祀	戰役特旨
	三十三年十月合祀	濟國事件
	三十四年十月合祀	濟國事件
	三十三年五月合祀	濟國事件
	三十七年八月合祀	事件
	三十八年五月合祀	事件
	三十七年九月合祀	事件
二	三十七年八月合祀	事件
	三十七年五月合祀	事件
一	三十七年八月合祀	事件
三	計	

少將	大佐	中佐	少佐	大尉	中尉	少尉候補生	機關大監	機關少監	大機關士	中機關士	機關中尉	少機關士	軍醫中監	軍醫少監	大軍醫	中軍醫	少軍醫	主計少監
			一	五		二									二		一	
				四								二			二			
				一					二									
	二																	
		一																
	一																	

| | | |

二等看護手	三等看護手	一等看護	二等看護	四等看護	一等看病人	二等看病人	三等主帳	二等主帳	一等主帳	三等筆記	二等筆記	一等筆記	三等廚宰	二等廚宰	一等廚宰	三等主廚	二等主廚	一等主廚	四等主廚
一							一	一											

○維新前後殉難者道府縣藩別

道府縣藩	明治二年六月合記 第一 同	明治十二年六月合記 第二 同	明治十六年五月合記 第三 同	明治十七年十一月合記 第四 同	明治二十一年五月合記 第五 同	明治二十一年十一月合記 第六 同	明治二十二年五月合記 第七 同	明治二十二年十一月合記 第八 同	明治二十四年十一月合記 第九 同	明治二十六年十一月合記 第十 同	明治二十九年五月合記 第一十 同	明治三十一年十一月合記 第二十 同	明治三十三年五月合記 第三十 同	小計	總計	三等機關士	航海修業生	火夫長	水夫	木工	火夫	海軍屬	海軍屬修業記	海軍技手	海軍通信技手
北海道															一五二								一		
青森縣															一〇二										
岩手縣															五										
宮城縣															二										
秋田縣															四〇										
山形縣															二										
福島縣															二、八八七										
茨城縣															一二二										
栃木縣															七七五	二	二								
群馬縣															八五										
埼玉縣															五六										
千葉縣															三、三二七	二	二	一							
東京府																									
神奈川縣																									
新潟縣																									
富山縣																									
石川縣																									
福井縣																									
山梨縣																									
長野縣																									
岐阜縣																									
愛知縣																									
三重縣																									
滋賀縣																									
京都府																									
大阪府																									
兵庫縣																									
奈良縣																									
和歌山縣																									
鳥取縣																									
島根縣																									
岡山縣																									
廣島縣																									
山口縣																									
德島縣																									
香川縣																									
愛媛縣																									
高知縣																									
福岡縣																									
佐賀縣																									
長崎縣																									
熊本縣																									
大分縣																									
宮崎縣																									
鹿兒島縣																									
沖繩縣																									
生野代官所支配																									
出石藩（同）																									
豐岡藩（但馬）																									
龜山藩（丹波）																									
福知山藩（同）																									
林田藩（同）																									
三日月藩（同）																									
姬路藩（播磨）																									
兵庫縣																									
小田原藩（同）																									
荻野山中藩（相模）																									
神奈川縣																									
大阪府																									
堺山藩（同）																									
宮津藩（丹後）																									
京都府																									
東京府																									
松前（同）																									
館藩（渡島）																									

| | | |

| 佐野藩(下野) | 二 | | |

| | | |

	大洲藩(同)	小松藩(同)	西條藩(同)	高知藩	高知藩(土佐)	土佐藩(同)	福岡藩	福岡藩(筑前)	秋月藩(同)	久留米藩(筑後)	柳川藩(同)	香春藩(豊前)	豊津藩(同)	小倉藩(同)	彦山修験(同)	中津藩(同)	府内藩(豊後)	佐賀藩(肥前)	熊本藩	熊本藩(肥後)
	八	一			一〇八			七七		一六	五	五	三			一		七七		二
					八〇															
					五															
										一八										
	一																			
	二				一九四	一三	一三	五四	二	四	三八	三	五	四	六	一	一	三七	一	二
					一六			一										一六		一
																		二三		
	九	一	一	一	一六	一	二	一三	一	一八	一八	五	五	三	六	一	一	一四	一	二

	人吉藩(同)	宮崎縣	佐土原藩(日向)	高鍋藩(同)	延岡藩(同)	府内藩(同)	鹿兒島藩	鹿兒島縣	宮家御旗下	九條家々臣	九條家々領	旗下	幕府	同直轄	十津川御親兵	第三遊軍隊	函館在住隊	軍艦乘組	合計
	三		五〇	一六				五五三	一	一		一			三三	八	一三	四	三、五八八
																			二
																			八〇
																			二九
																			六〇六
																			一八
	一		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三	八	三	四	一、四五〇
																			六一
	一		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三	八	三	四	一、二七三
																			八〇
																			一
																			三
																			二
																			七、一〇一

○佐賀、臺灣、朝鮮、熊本、山口、福岡、西南並竹橋事變二十七八年及臺灣朝鮮、三十三年事件臺灣守備隊ニ於ケル合祀者道府縣別(右書ハ陸軍及其他左書ハ海軍及其他)

道府縣	開拓使	北海道	東京府	京都府	大阪府	堺縣	神奈川縣	兵庫縣
佐賀ノ役 明治七年二月合記			二	一	一	一		一
臺灣ノ役 明治八年十二月合記								
朝鮮事變 明治十五年十一月合記			五					
熊本鎮臺 岡山口ノ變 明治十年一月合記			二					
南役 明治十年二月ノ一七日			二					
竹橋事變 明治十一年十一月合記								
征討軍人軍屬及軍役ニ關係アル者ノ死亡ニ付賜金ノ件ニ依リ明治十七年十二月合記			一					
小計			一六	一	一	一		一

道府縣	豐岡縣	長崎縣	新潟縣	埼玉縣	群馬縣	千葉縣	茨城縣	栃木縣	奈良縣	三重縣
佐賀ノ役 明治七年二月合記	一	四							二	
臺灣ノ役 明治八年十二月合記										
朝鮮事變 明治十五年十一月合記		一								
熊本鎮臺 岡山口ノ變 明治十年一月合記										
南役 明治十年二月ノ一七日										
竹橋事變 明治十一年十一月合記										
征討軍人軍屬及軍役ニ關係アル者ノ死亡ニ付賜金ノ件ニ依リ明治十七年十二月合記										
小計	一	五							二	

縣																					
愛知縣																					
靜岡縣																					
山梨縣																					
滋賀縣																					
岐阜縣																					
長野縣																					
宮城縣																					
福島縣																					
岩手縣																					
青森縣																					
山形縣																					
秋田縣																					
敦賀縣																					
福井縣																					
石川縣																					
富山縣																					
鳥取縣																					
島根縣																					
岡山縣																					
小田縣																					

| 縣 | | |

縣	計	二〇九	一二	一九	一三二	六、九四八	四	一三、五七二	一、三七二	二二、二六六

（編者云、表中豐岡縣以下舊縣名ヲ記載セルハ合祀當時ノ稱ニシテ祭神簿ニ據レルナリ、之ヲ現制ノ縣別トナサントスルモ該簿ニ郡村名ヲ記サザルヲ以テ止ムヲ得ザルナリ、）

○三十七八年及韓國暴徒鎭壓事件ニ於ケル合祀者道府縣別 右書ハ陸軍及其他 左書ハ海軍及其他

道府縣	三十七八年事件合祀	三十七八年事件合祀（特記）	三十七八年事件及韓國暴徒鎭壓事件合祀（特記）	三十七八年事件合祀（特記）	三十七八年事件合祀（特記）
北海道	三八八	六六〇	二三五	四二	三
	一二	一	四	〇	〇
					小計 一、三三九
東京府	一、二五八	七一三	八三二	五五	五
	四四	八	九	〇	〇
				一七	一七
京都府	六九四	三二一	五六二	六三	〇
	一六	二	一	〇	〇
				一五	一五
大阪府	八五四	三三〇	六七七	三八	九
	六九	三	一四	〇	〇
					一、九〇九
神奈川縣	六四四	三四二	三九六	三一	五
	三〇	一	二七	〇	一
					一、四二八
兵庫縣	一、二二六	九七八	一、〇二一	五四	三二
	七七	六	一五	四	〇
					一〇二
長崎縣	二七二	七二	三六七	二二	一四
	二八	四	九	〇	一
					七四六
新潟縣	一、二七七	一、二五六	七九〇	五七	二二
	一九	三	三八	〇	一
					三、四一三
埼玉縣	七七〇	四八五	七〇〇	二五	一〇
	一〇	〇	二	〇	〇
					一、九九四
群馬縣	五八八	四三六	四三二	三五	一二
	八	〇	二	〇	〇
					一、五〇四
千葉縣	五八一	七〇三	六三〇	三二	一九
	一七	一	二	〇	〇
					一、九六七
茨城縣	八七六	四八七	四八九	三二	二四
	二六	二	六	〇	一
					一、九〇九
栃木縣	三	一	一	〇	〇
	五一一	三三二	三四六	一三	一〇
					一、二一二
奈良縣	二七五	一四二	二七八	三四	五
	七	一	一	〇	〇
					七三四

| | | |

| | | |

指令願之通聞届候事　八月二日

〔明治二年七月鞫師源八ヨリ軍務官ヘノ願書〕今般招魂社御造立ニ相成其御眞體御劍御鞘私ヘ被仰付就其職業候而者冥加至極難有仕合奉存候右御鞘之儀者御社ヘ寄附仕度懇願御座候何卒此段御採用被成下候樣奉願上候以上

願之通聞届候事　八月四日

〔明治二年八月四日付兵部省ヨリ栗原筑前ヘ賞狀〕招魂社神劍一振右奉納候條奇特之至仍而別紙目錄ノ通下賜候事　別紙目錄金拾五兩

〔明治二年八月四日兵部省ヨリ鞫師源八ヘ賞狀〕右神劍鞘奉納奇特之事ニ付爲御褒美銀弐枚被下候事

〔編者云、栗原筑前ハ其名ヲ健次ト稱ス、江戸本郷弓町ニ生レ其先柄木ヨリ出ツト云フ、源八ハ姓ヲ樫井ト稱シ神田金澤町ニ生レ、鞫師ハ小堀某ノ弟子ナリシト云フ、〕

〔明治四年九月二十八日招魂社掛松岡中錄青山一介ヨリ兵部省ヘノ伺〕是迄本省ヨリ漸々御廻シ相成候戰死人名冊ニ認有之候處今般卷物ニ仕立御社ヘ納候樣相成夫々相關候處各藩戰死人名至ラ少ナク有之候今一應諸縣ヘ御達被下候ヲ近年勤王戰死ヲ始メ陣中病死ニ至ルマテ悉ク申出被仰付御省ヨリ招魂社掛ヘ御下渡

相成候樣云々

〔祭神中贈位セラレシ氏名〕姓名ノ肩書ノ右書合ハ合祀年月　左書贈ハ贈位年月

〔正三位〕贈三一、二〇　大寺　安純

〔從三位〕合二二、五　贈二四、二　松平　賴德

〔正四位〕

合二四、一一　贈二四、二　大浦　敎之助
合二二、一一　贈二四、四　日下部伊三次
合二四、一一　贈二四、四　小林良典權大輔
合二八、二一　贈三一、二　坂本八郎太
合二一、五　贈二四、四　周布政之助
合二二、五　贈二四、二　武田伊賀守
合二四、一一　贈三一、七　月形　洗藏
合二一、五　贈三一、一〇　中山　忠光
合二一、五　贈三、四　丹羽　賴德
合二一、五　贈二四、四　福原　越後
合二二、六　贈三一、七　福田　俠平
合二一、五　贈二四、四　益田右衛門介
合二二、五　贈二四、四　入江　九一
合二四、一一　贈二四、四　梅田源次郎
合二四、一一　贈三一、七　海津　幸一
合二四、一一　贈二四、九　清川　八郎
合二一、五　贈二四、四　久阪　義助
合二一、五　贈二四、四　來島又兵衛
合二四、一一　贈三五、一一　兒玉雄一郎
合二四、一一　贈二四、二　佐久間佐兵衛
合二四、一一　贈二四、二　成就院忍向
合二四、一一　贈二四、二　清水清太郎
合二二、五　贈二四、二　高橋多一郎
合二一、五　贈二四、四　田中河內介
合二二、五　贈二四、二　武市半平太
合二一、五　贈二四、四　高杉　晉作
合二二、五　贈二四、二　竹內正兵衛
合二四、一一　贈三五、一一　月形　深藏
合二二、五　贈二四、二　茅根伊豫之介
合二一、五　贈二四、四　寺島忠三郎
合二四、一一　贈二四、二　中村　九郎
合二四、一一　贈二四、四　平野　二郎（一次）
合二二、六　贈二四、四　時山　直八
合二一、五　贈二四、二　楢崎　彌八（贈八郎）
合二三、八　贈三七、四　廣瀨　武夫
合二一、一　贈二四、四　前田孫右衛門

合二四、一一 松島 剛藏　贈三一、一七 松村 大成　合二四、一一 毛利 登人
贈二四、一四 宮部 鼎藏　合二四、一一 梁川 新十郎　贈二四、一二 山田 亦助
合二三、一一 山國 兵部　贈二四、一二 吉田 寅次郎　合二一、一五 大和國之助
贈二四、一二 渡邊内藏太　贈二四、一四 吉村 貫太郎　贈二四、一一 額 三樹三郎

〔從四位〕

合二四、一一 有馬 新七　合二、一六 鮎澤伊太夫　合二一、一五 淺見安之丞
贈三一、一七 安積 五郎　贈三一、一七 池内藏太
合二四、一一 有村 雄助　合二四、一二 飯田 左馬　合一六、一五 池内藏太
贈三五、一一 衣非 茂記　贈二四、一二 鵜飼吉左衛門　合二二、一五 鵜飼 幸吉
合二四、一一 宇喜多一蕙　合二四、一一 大橋 順藏　贈二四、一一 大久保 要
贈二四、一二 勝野 豐作　贈二四、一二 河上彌一郎　合二四、一一 河合總兵衛
合二一、一五 河田(内) 敬藏　贈二四、一二 清岡道之助　贈三一、一六 清岡治之助
贈三一、一七 來原 良藏　合二四、一一 是枝柳右衛門　贈二四、一二 北添 佶摩
合二四、一一 櫻 任藏　贈二四、一二 佐久良東雄　合二一、一五 兒玉次郎彦
贈二四、一二 齋藤五六郎　贈三五、一一 齋藤 監物　贈二四、一二 齋藤留次郎
合二四、一一 澁谷伊豫作　贈二四、一二 成就院信海　合二二、一五 柴山愛次郎
贈三五、一一 菰眼寺嵐康　合一六、一五 島村 衛吉　贈二四、一二 中村 圓太
合二四、一一 杉山 松介(助)　贈三一、一七 宍戸彌四郎　合二一、一五 信田(篤)作太夫
贈二四、一二 關 鐵之介　合二、一五 世良 修藏

合二四、一一 田中 謙助　合二四、一一 多田彌太郎　合一六、一五 田内 衛吉
贈二四、一二 多田九稻之衛門　贈三一、一七 建部 武彦　合二二、一五 高橋莊左衛門
合一六、一五 田所 壯輔　合二四、一一 鷹取 養巴　合二四、一一 竹内 延秀
贈三一、一七 武田彦右衛門　贈四〇、一五 武田 斐　贈二八、一二 田上 覺
合二二、一五 千屋菊次郎　合二二、一一 弟子丸龍助　合二四、一一 伴林 光平
贈二四、一二 富小路任節　贈二四、一二 永島 三平　合一六、一五 那須信吾
合二四、一一 中島太郎兵衛　合二一、一五 中谷 正亮　贈二四、一二 丹波出雲守
贈三六、一一 橋口 壯藏　贈二四、一二 橋口 傳藏　合二四、一一 萬代十兵衛
合二四、一二 弘瀨 健太　合二四、一一 廣田 精一　合一六、一五 久松喜代馬
贈二四、一二 藤田小四郎　合二一、一五 船越 清藏　合二四、一一 藤本 眞金
合二四、一一 本城 清　贈二四、一二 松本謙三郎　合一六、一五 間崎 哲馬
合二四、一一 松田 重助　贈二四、一二 松林廉之助　合二一、一五 松山 深藏
合一六、一五 村田忠三郎　合二二、一一 森山 新藏　合十六、一五 望月龜彌太
合二四、一一 森 安平　合二二、一一 山本 四郎　合二四、一一 山本貞一郎
合一六、一五 安岡 嘉助　合三八、三五 山中 幹　合二一、一五 吉田 年麿(卷)
合一六、一五 小畑孫三郎　合二四、一一 尾崎總左衛門　合二一、一五 井上 唯一

〔正五位〕

合二四、一二 青木新三郎
贈二四、一二 青木兼吉郎
合二四、一二 有吉熊次郎
贈三一、一七 安東 鐵馬
合二四、一二 粟屋 達道
贈三一、一七 阿閉 信足
合二四、一二 安藤眞之助
贈三五、一一 有村次左衛門
合二六、一一 青木與三郎
贈三五、一一 天宮慎太郎
合二一、一五 阿川 四郎
贈三五、一一 阿部宗兵衛
合二二、五五 朝倉源太郎
贈四〇、五五 青山 忠次
合二八、一二 新谷 德平
贈三一、一〇 石塚鐘太
合二四、一一 泉 仙介
贈三一、一七 稻垣覺之丞
合二四、一一 伊舟城源一郎
贈三一、一七 市川 豊次
合二四、一一 石川厚狹介
贈三一、一七 石川 一
合二四、一一 乾 十郎
贈三一、一七 石川潤次郎
合二四、一一 井澤 宜庵
贈三一、一七 伊藤甲之助
合二四、一一 伊藤清兵衛
贈三五、一一 稻田 重藏
合二四、一一 今中祐十郎
贈三五、一一 今中作兵衛
合二四、一一 伊丹眞一郎
贈三五、一一 池尻茂四郎
合一八、五五 磯林 眞三
贈四〇、七五 上田 楠次
合二四、一一 宇都宮堯珉
贈三五、一一 宇都宮有允
合二四、一一 江坂元之助
贈三一、一〇 江坂榮次郎
合二四、一一 江上榮之進
贈三五、一一 江上榮之助
合二四、一一 大利 鼎吉
贈二四、一二 大高又次郎
合二四、一一 太田權右衛門
贈二四、一二 大野木仲三郎
合二四、一一 大浦 遠
贈三五、一一 大關和七郎
合二四、一一 大神壹岐
贈二四、一二 沖 剛介
合二四、一一 奥田萬次郎
贈三五、一一 宇都宮有允
合二四、一一 川瀬 幸
贈二四、一二 河村能登守
合二一、五五 川瀬專藏
贈四〇、五五 川崎孫四郎
合二四、一一 河合傳十郎
贈三一、一七 河内山 勝
合二四、一一 加藤 司書
贈三五、一一 加藤 常吉
合二四、一二 海賀宮門
贈二四、一二 海賀宮門
合一六、五五 上岡膳治
贈三一、一七 柏原禎吉
合二四、一一 甲斐右膳
贈三五、一一 甲斐右膳

合二四、一一 加屋 四郎
贈三五、一一 神田 香熊
合二八、一二 神田 香熊
贈三一、一二 樺山 勇輔
合二一、五五 香川 半助
贈四四、六五 金子 重輔
合二一、一六 楠目 清馬
贈三一、一七 岸 上 弘
合二一、一一 日下部裕之進
贈三五、一一 黒澤忠三郎
合二四、一一 黒田與一郎
贈四〇、五五 栗田源左衛門
合三八、一〇 栗生 俊健
贈三七、五五 栗田與一郎
合二四、一一 駒井 晴庵
贈三一、一六 近藤次郎太郎
合一六、一六 駒井政五郎
贈三一、一七 近藤長次郎
合二二、五五 小林 幸八
贈四〇、五五 金平 々々
合二四、一一 佐々 耕庵
贈三五、一一 佐々 金平
合二四、一一 小場 兵馬
贈四〇、一六 古東領左衛門
合二四、一一 佐々 耕庵
贈三五、一一 佐々 金平
合二四、一一 澤島 正暗
贈三五、一一 佐座謙三郎
合二四、一一 澤村 幸吉
贈三一、一七 澤村宗之丞
合二四、一一 佐野竹之介
贈三五、一一 佐竹 織江
合二四、一一 齋田 要人
贈三五、一一 齋田 要七
合二一、五五 櫻井三木三
贈四四、六五 白石平八郎
合二四、一一 白石 廉作
贈二四、一二 下野 勘平
合二一、五五 島村省吾
贈三一、一七 島 浪馬
合二四、一一 澁川 榮承
贈三五、一一 澁川 榮承
合二八、一二 志摩 清直
贈三一、一〇 志摩 清直
合二二、五五 須藤敬之進
贈四〇、五五 須藤敬之進
合二四、一一 杉山彌一郎
贈三五、一一 杉山彌一郎
合二四、一一 千秋順之助
贈二四、一二 千秋順之助
合二四、一一 仙石佐多男(通)
贈三一、一七 仙石佐多男(通)
合二八、一二 新 保 正
贈三一、一〇 須 山 萬
合二四、一一 溜口三兵衛
贈三五、一一 世木 騎六
合二四、一一 關 敏樹
贈三一、一七 關谷 裕
合二四、一一 瀬之口覺次郎
贈二四、一二 瀬之口覺次郎
合二一、五五 田中 正雄
贈二四、一二 田中左馬介
合二四、一一 田河 武整
贈三一、一七 田所鹿次郎
合二四、一一 田岡俊三郎
贈三六、一一 高橋 正功
合二四、一一 高橋 幸佑
贈三一、一七 高橋甲太郎
合二八、一二 高橋 義篤
合二四、一一 高木元右衛門
贈三五、一一 高木元右衛門

合二四、一一 贈三五、一一 託間 樊六
合二四、一一 贈四〇、一五 瀧平 主殿
合二四、一一 贈三一、一七 千葉都太郎
合二四、一一 贈二四、一一 豐田 美稻
合二四、一一 贈三一、一七 人見 極馬
合二四、一一 贈二四、一一 深瀨 繁理
合二四、一一 贈三五、一一 藤村 太郎
合二四、一一 贈三一、一七 堀 青
合二四、一一 贈三五、一一 鷹羽 淨典
合二四、一一 贈三五、一一 玉木 直介（入婿）
合二四、一一 贈三一、一六 竹內 英男
合二四、一一 贈三五、一一 辻 都之助
合二四、一一 贈二四、一一 長尾郁三郎
合二四、一一 贈二四、一一 中島 源藏
合二四、一一 贈三一、一八 中萬 德次
合二四、一一 贈三一、一六 那須 俊平
合二四、一一 贈一六、一二 西山謙之助
合二四、一一 贈三五、一一 野村 助作
合二四、一一 贈三五、一一 蓮田市五郎
合二四、一一 贈二四、一一 林 豹吉郎
合二四、一一 贈三一、一七 槇島 光顯
合二四、一一 贈二四、一一 水郡善之祐
合二四、一一 贈三一、一七 宮田半四郎
合二四、一一 贈二四、一一 宮城 彥助
合二四、一一 贈二四、一一 村田 宗武
合二四、一一 贈二四、一一 村越千代吉
合二四、一一 贈三五、一一 森 五六郎
合二四、一一 贈二五、一一 森山繁之介
合二四、一一 贈三一、一六 安岡覺之助
合二四、一一 贈三五、一一 山崎 獵藏
合二四、一一 贈三八、五 山崎 源太
合二四、一一 贈四〇、五 橫田藤四郎
合三九、五 贈三八、四 若松 丈作
合二四、一一 贈三五、一一 永田 廉平
合二四、一一 贈四〇、五 根本 新平
合二四、一一 贈三五、一一 能勢達太郎
合二四、一一 贈二四、一一 半田 門吉
合二四、一一 贈三五、一一 廣木松之介
合二四、一一 贈二四、一一 弘 勝之助
合二四、一一 贈三五、一一 古高俊太郎
合二四、一一 贈三五、一一 堀 六郎
合二四、一一 贈三五、一一 竹本 多門
合二四、一一 贈三一、一六 千屋 金策
合二四、一一 贈四、一二 豐間源之進
合二四、一一 贈二四、一一 中野 治平
合二四、一一 贈三五、一一 中村 哲藏
合二四、一一 贈三一、一六 鍋島米之助
合二四、一一 贈三五、一一 西島龜太郎
合二四、一一 贈二四、一一 野村 望東
合二四、一一 贈三一、一七 橋本 若狹
合二四、一一 贈四〇、五 畑 彌平
合二四、一一 贈三五、一一 廣岡 總助
合二四、一一 贈三五、一一 藤山 衛門
合二四、一一 贈三五、一一 松浦龜太郎
合二四、一一 贈三五、一一 玉木 直介（入婿）
合二四、一一 贈三一、一七 武久三保三郎
合二四、一一 贈三五、一一 長野 一郎
合二四、一一 贈三五、一一 中村恒次郎
合二四、一一 贈三一、一六 中平龍之助
合二四、一一 贈二四、一一 丹羽 精藏
合二四、一一 贈二四、一一 野崎 主計
合二四、一一 贈三一、一七 荻原 虎六
合二四、一一 贈四〇、五 長谷川通之介
合二四、一一 贈三五、一一 廣岡子之次郎
合二四、一一 贈二四、一一 不破富太郎
合二四、一一 贈三一、一六 藤井織之祐（入婿）
合二四、一一 贈二四、一一 星野 文平
合二四、一一 贈三五、一一 松浦 八郎
合二四、一一 贈三五、一一 竹本 多門
合二四、一一 贈三一、一七 千屋 金策
合二四、一一 贈四、一二 豐間源之進
合二四、一一 贈三五、一一 中村 哲藏
合二四、一一 贈三五、一一 西島龜太郎
合二四、一一 贈二四、一一 野村 望東
合二四、一一 贈三一、一七 橋本 若狹
合二四、一一 贈四〇、五 畑 彌平
合二四、一一 贈三五、一一 廣木松之介
合二四、一一 贈二四、一一 古高俊太郎
合二四、一一 贈三五、一一 堀 浩太郎
合二四、一一 贈四四、一六 松浦龜太郎

合二四、一二 贈二四、一一 松田市太夫
合二四、一二 贈二四、一二 增井 熊太
合二四、一二 贈三一、一七 槇島 光顯
合二四、一二 贈三一、一七 水郡善之祐
合二四、一二 贈三五、一一 宮田半四郎
合二四、一二 贈二四、一二 宮城 彥助
合二四、一二 贈二四、一二 村田 宗武
合二四、一二 贈二八、一二 村越千代吉
合二四、一二 贈三五、一一 森 五六郎
合二四、一二 贈二五、一一 森山繁之介
合二四、一二 贈三一、一六 安岡覺之助
合二四、一二 贈三五、一一 山崎 獵藏
合三九、五 贈三八、五 山崎 源太
合二四、一二 贈四〇、五 橫田藤四郎
合三九、五 贈三八、四 若松 丈作
合二四、一二 贈二四、一二 松田東吉郎
合二四、一二 贈三一、一七 增田 正房
合二四、一二 贈三一、一七 槇島 光顯
合二四、一二 贈四〇、五 水郡善之祐
合二四、一二 贈三五、一一 宮田半四郎
合二四、一二 贈二四、一二 宮城 彥助
合二四、一二 贈二四、一二 村田 宗武
合二四、一二 贈二八、一二 村越千代吉
合二四、一二 贈三五、一一 森 五六郎
合二四、一二 贈二五、一一 森山繁之介
合二四、一二 贈三一、一六 安岡覺之助
合二四、一二 贈三五、一一 山崎 獵藏
合三九、五 贈三八、五 山崎 源太
合二四、一二 贈四〇、五 橫田藤四郎
合三九、五 贈三八、四 若松 丈作
合二四、一二 贈二四、一二 井汲 唯一
合二四、一二 贈二四、一二 松下 鐵馬
合二四、一二 贈三一、一七 增田 正房
合二四、一二 贈三一、一七 前田 繁馬
合二四、一二 贈四〇、五 前木六三郎
合二四、一二 贈三五、一一 宮地 宜藏
合二四、一二 贈三一、一七 深栖 俊助
合二四、一二 贈三七、三 三浦 容夫
合二四、一二 贈二四、一二 村井修理少進
合二四、一二 贈二四、一二 目時隆之進
合二四、一二 贈三一、一七 森 六物
合二四、一二 贈三一、一七 森下 幾馬
合二四、一二 贈二四、一二 保田 正經
合二四、一二 贈三五、一一 安田喜八郎
合二四、一二 贈二四、一二 吉田 大八
合二四、一二 贈三五、一一 山田 鵬輔
合二四、一二 贈三五、一一 波邊與八郎
合二四、一二 贈二四、一二 井原 應助
合二四、一二 贈三一、一六 牧野 群馬
合二四、一二 贈三五、一一 森下 儀之助
合二四、一二 贈三一、一六 柳井 健次
合二四、一二 贈二四、一二 山口辰之介
合二四、一二 贈二四、一二 山本 忠知
合二四、一二 贈三一、一七 波邊 緝
合二四、一二 贈三五、一一 井村 簡二

合二二、五 井田半三郎
贈四〇、五
合二四、一一 小川幸三
贈二四、一二
〔從五位〕
合三四、一〇 安藤辰五郎
贈三四、一〇
合二二、五 朝倉三四郎
贈四〇、五
合二四、一一 生島大炊
贈三五、一一
合二四、一一 伊藤龍五郎
贈三六、一一
合二四、一一〇 岩根常重
贈三一、一一〇
合二四、一一 内田彌三郎
贈三五、一一
合三一、一一 宇和川匡義
贈三一、一一
合二四、一一 太田六右衛門
贈三六、一一
合二八、一一〇 大石肇
贈三一、一一〇
合二四、一一 加須屋貞藏
贈三一、一一
合二二、五 河本杜太郎
贈四〇、五
合二四、一一 小藤平藏
贈三五、一一
合二八、一一 金藤之明
贈三一、一一
合二九、一一 齋藤正起
贈三一、一一
合二八、一一 柴山勇吉
贈三一、一一
合三一、一一 鈴木清治
贈三一、一一
合二二、五 關內熊五郎
贈四〇、五
合二四、一一 田中楠之助
贈三五、一一
合二四、一一 萬松平十郎
贈四〇、五
合二二、五 瀧口六三郎
贈四〇、五
合一六、七 千屋熊太郎
贈三一、七
合一六、七 寺尾權平
贈三一、七
合一六、七 中島與一郎
贈三一、七
合一六、七 木下嘉久次
贈三一、七
合二四、一一 城島公茂
贈三五、一一
合三四、一〇 國枝熊雄
贈三四、一〇
合二四、一一 小藤平藏
贈三五、一一
合二八、一一 金藤之明
贈三一、一一
合二九、一一 齋藤正起
贈三一、一一
合二八、一一 柴山勇吉
贈三一、一一
合三一、一一 鈴木清治
贈三一、一一
合二二、五 關內熊五郎
贈四〇、五
合二四、一一 田中楠之助
贈三五、一一
合二四、一一 萬松平十郎
贈四〇、五
合二二、五 瀧口六三郎
贈四〇、五
合一六、七 千屋熊太郎
贈三一、七
合一六、七 寺尾權平
贈三一、七
合一六、七 中島與一郎
贈三一、七
合一六、七 木下慎之助
贈三一、七
合二四、一一 小川幸三
贈二四、一二
〔從五位〕
合三四、一〇 安藤辰五郎
贈三四、一〇
合二二、五 朝倉三四郎
贈四〇、五
合二四、一一 生島大炊
贈三五、一一
合二四、一一 伊藤龍五郎
贈三六、一一
合二四、一一〇 岩根常重
贈三一、一一〇
合二四、一一 内田彌三郎
贈三五、一一
合三一、一一 宇和川匡義
贈三一、一一
合二四、一一 太田六右衛門
贈三六、一一
合二八、一一〇 大石肇
贈三一、一一〇
合二四、一一 加須屋貞藏
贈三一、一一
合二二、五 河本杜太郎
贈四〇、五
合二四、一一 小藤平藏
贈三五、一一
合二八、一一 金藤之明
贈三一、一一
合二九、一一 齋藤正起
贈三一、一一
合二八、一一 柴山勇吉
贈三一、一一
合三一、一一 鈴木清治
贈三一、一一
合二二、五 關內熊五郎
贈四〇、五
合二四、一一 田中楠之助
贈三五、一一
合二四、一一 萬松平十郎
贈四〇、五
合二二、五 瀧口六三郎
贈四〇、五
合一六、七 千屋熊太郎
贈三一、七
合一六、七 寺尾權平
贈三一、七
合一六、七 中島與一郎
贈三一、七

合二四、一一 岡村定之丞
贈三一、一一
合二四、一一 小川幸三
贈二四、一二
〔從五位〕
合三四、一〇 安藤辰五郎
贈三四、一〇
合二二、五 朝倉三四郎
贈四〇、五
合二四、一一 生島大炊
贈三五、一一
合二四、一一 伊藤龍五郎
贈三六、一一
合二四、一一〇 岩根常重
贈三一、一一〇
合二四、一一 内田彌三郎
贈三五、一一
合三一、一一 宇和川匡義
贈三一、一一
合二四、一一 太田六右衛門
贈三六、一一
合二八、一一〇 大石肇
贈三一、一一〇
合二四、一一 加須屋貞藏
贈三一、一一
合二二、五 河本杜太郎
贈四〇、五
合二四、一一 小藤平藏
贈三五、一一
合二八、一一 金藤之明
贈三一、一一
合二九、一一 齋藤正起
贈三一、一一
合二八、一一 柴山勇吉
贈三一、一一
合三一、一一 鈴木清治
贈三一、一一
合二二、五 關內熊五郎
贈四〇、五
合二四、一一 田中楠之助
贈三五、一一
合二四、一一 萬松平十郎
贈四〇、五
合二二、五 瀧口六三郎
贈四〇、五
合一六、七 千屋熊太郎
贈三一、七
合一六、七 寺尾權平
贈三一、七
合一六、七 中島與一郎
贈三一、七
合二四、一一 岡村定之丞
贈三一、一一
合二四、一一 小川幸三
贈二四、一二
〔從五位〕
合三四、一〇 安藤辰五郎
贈三四、一〇
合二二、五 朝倉三四郎
贈四〇、五
合二四、一一 生島大炊
贈三五、一一
合二四、一一 伊藤龍五郎
贈三六、一一
合二四、一一〇 岩根常重
贈三一、一一〇
合二四、一一 内田彌三郎
贈三五、一一
合三一、一一 宇和川匡義
贈三一、一一
合二四、一一 太田六右衛門
贈三六、一一
合二八、一一〇 大石肇
贈三一、一一〇
合二四、一一 加須屋貞藏
贈三一、一一
合二二、五 河本杜太郎
贈四〇、五
合二四、一一 小藤平藏
贈三五、一一
合二八、一一 金藤之明
贈三一、一一
合二九、一一 齋藤正起
贈三一、一一
合二八、一一 柴山勇吉
贈三一、一一
合三一、一一 鈴木清治
贈三一、一一
合二二、五 關內熊五郎
贈四〇、五
合二四、一一 田中楠之助
贈三五、一一
合二四、一一 萬松平十郎
贈四〇、五
合二二、五 瀧口六三郎
贈四〇、五
合一六、七 千屋熊太郎
贈三一、七
合一六、七 寺尾權平
贈三一、七
合一六、七 中島與一郎
贈三一、七

合二四、一一 岡村元太郎
贈三五、一一
合二四、一一 小坂小次郎
贈三五、一一
合一六、七 新井竹次郎
贈三一、七
合二二、五 荒卷羊三郎
贈三五、一一
合一六、七 尾崎幸之進
贈三一、七
合二二、五 安藤謙次
贈四〇、五
合二二、五 秋山又三郎
贈四〇、五
合二九、一二 淺尾重行
贈三一、一二
合二一、五 伊藤貞藏
贈三五、一一
合二二、五 十嵐關八
贈四〇、五
合二八、一一〇 今井建
贈三一、一一〇
合二四、一一 上原太內
贈三一、一一
合二一、五 江頭種八
贈三五、一一
合二二、五 大見又太郎
贈四〇、五
合二四、一一 片山九市
贈三五、一一
合二八、一一〇 桂安雄
贈三七、一一
合二四、一一 岡元太郎
贈三一、一一
合一六、七 尾崎幸之進
贈三一、七
合一六、七 安藤謙次
贈三一、七
合二二、五 秋山又三郎
贈四〇、五
合二九、一二 淺尾重行
贈三一、一二
合二一、五 伊藤貞藏
贈三五、一一
合二二、五 十嵐關八
贈四〇、五
合二八、一一〇 今井建
贈三一、一一〇
合二四、一一 上原太內
贈三一、一一
合二一、五 江頭種八
贈三五、一一
合二二、五 大見又太郎
贈四〇、五
合二四、一一 片山九市
贈三五、一一
合二八、一一〇 桂安雄
贈三七、一一
合二四、一一 岡元太郎
贈三一、一一
合一六、七 尾崎幸之進
贈三一、七
合一六、七 安藤謙次
贈三一、七
合二二、五 秋山又三郎
贈四〇、五
合二九、一二 淺尾重行
贈三一、一二
合二一、五 伊藤貞藏
贈三五、一一
合二二、五 十嵐關八
贈四〇、五
合二八、一一〇 今井建
贈三一、一一〇
合二四、一一 上原太內
贈三一、一一
合二一、五 江頭種八
贈三五、一一
合二二、五 大見又太郎
贈四〇、五
合二四、一一 片山九市
贈三五、一一
合二八、一一〇 桂安雄
贈三七、一一

合二二、五 井田半三郎
贈四〇、五
合二四、一一 小川幸三
贈二四、一二
〔從五位〕
合三四、一〇 安藤辰五郎
贈三四、一〇
合二二、五 朝倉三四郎
贈四〇、五
合二四、一一 生島大炊
贈三五、一一
合二四、一一 伊藤龍五郎
贈三六、一一
合二四、一一〇 岩根常重
贈三一、一一〇
合二四、一一 内田彌三郎
贈三五、一一
合三一、一一 宇和川匡義
贈三一、一一
合二四、一一 太田六右衛門
贈三六、一一
合二八、一一〇 大石肇
贈三一、一一〇
合二四、一一 加須屋貞藏
贈三一、一一
合二二、五 河本杜太郎
贈四〇、五
合二四、一一 小藤平藏
贈三五、一一
合二八、一一 金藤之明
贈三一、一一
合二九、一一 齋藤正起
贈三一、一一
合二八、一一 柴山勇吉
贈三一、一一
合三一、一一 鈴木清治
贈三一、一一
合二二、五 關內熊五郎
贈四〇、五
合二四、一一 田中楠之助
贈三五、一一
合二四、一一 萬松平十郎
贈四〇、五
合二二、五 瀧口六三郎
贈四〇、五
合一六、七 千屋熊太郎
贈三一、七
合一六、七 寺尾權平
贈三一、七
合一六、七 中島與一郎
贈三一、七
合三四、一〇 木內末男
贈四〇、五
合二二、五 桑屋元三郎
贈四〇、五
合一六、七 小松小太郎
贈三一、七
合二四、一一 近藤貢
贈三六、一一
合二一、五 酒井傳次郎
贈三五、一一
合二六、一一 白石內藏進
贈三六、一一
合一六、七 須賀恒次
贈三一、七
合二四、一一 仙田一郎
贈三五、一一
合一六、七 田中收吉
贈三一、七
合二四、一一 武林八郎
贈三五、一一
合二四、一一 武田禮作
贈三四、八
合二四、一一 武久二保三郎
贈三四、一一
合二四、一一 中條右京
贈三五、一一
合三四、一〇 寺倉孫一
贈三四、八
合二四、一一 中津彥太郎
贈三五、一一
合二二、五 木村園三郎
贈四〇、五
合二二、五 黑澤五郎
贈三五、一一
合二四、一一 小南良知
贈三四、八
合二一、五 小島强介
贈四一、九
合二四、一一 櫻井新三郎
贈四三、一一
合二二、五 下野廉三郎
贈四〇、五
合二二、五 杉山秀太郎
贈四〇、五
合二四、一一 仙田淡三郎
贈三五、一一
合二八、一一 田中時哉
贈三五、一一
合二二、五 高橋市兵衛
贈四〇、五
合三九、一一 谷口運太郎
贈三八、一一
合一六、七 豐永斧馬
贈三一、七
合二四、一一 鵜田陶司
贈三五、一一
合三四、一〇 寺倉孫一
贈三四、八
合二四、一一 中津彥太郎
贈三五、一一
合二二、五 木村園三郎
贈四〇、五
合二二、五 黑澤五郎
贈三五、一一
合二四、一一 小南良知
贈三四、八
合二一、五 小島强介
贈四一、九
合二四、一一 櫻井新三郎
贈四三、一一
合二二、五 下野廉三郎
贈四〇、五
合二二、五 杉山秀太郎
贈四〇、五
合二四、一一 仙田淡三郎
贈三五、一一
合二八、一一 田中時哉
贈三五、一一
合二二、五 高橋市兵衛
贈四〇、五
合三九、一一 谷口運太郎
贈三八、一一
合一六、七 豐永伊左馬
贈三一、七
合二四、一一 津田愛之助
贈三五、一一
合三四、一〇 青木俊造
贈三四、八
合二一、五 伊藤百合五郎
贈三五、一一
合二二、五 岩間久次郎
贈四〇、五
合三四、一〇 板倉正七郎
贈三四、八
合二一、五 大谷準藏
贈三一、一一
合二二、五 大久保信之介
贈四〇、五
合一六、七 掛橋和泉
贈三一、七
合二四、一一 川原忠藏
贈三五、一一
合三八、一一 梶村丈夫
贈三七、一一
合二二、五 岡部三十郎
贈四〇、五
合一六、七 尾崎健藏
贈三一、七
合二二、五 安藤直之進
贈四〇、五
合三四、一〇 青木俊造
贈三四、八
合二一、五 伊藤百合五郎
贈三五、一一
合二二、五 岩間久次郎
贈四〇、五
合三四、一〇 板倉正七郎
贈三四、八
合二一、五 大谷準藏
贈三一、一一
合二二、五 大久保信之介
贈四〇、五
合一六、七 掛橋和泉
贈三一、七
合二四、一一 川原忠藏
贈三五、一一
合三八、一一 梶村丈夫
贈三七、一一
合二二、五 岡部三十郎
贈四〇、五
合一六、七 尾崎健藏
贈三一、七
合二二、五 安藤直之進
贈四〇、五
合三四、一〇 青木俊造
贈三四、八
合二一、五 伊藤百合五郎
贈三五、一一
合二二、五 岩間久次郎
贈四〇、五
合三四、一〇 板倉正七郎
贈三四、八
合二一、五 大谷準藏
贈三一、一一
合二二、五 大久保信之介
贈四〇、五
合一六、七 掛橋和泉
贈三一、七
合二四、一一 川原忠藏
贈三五、一一
合三八、一一 梶村丈夫
贈三七、一一

合二一、五 中村 喜三 贈三五、二一 合二一、五 楢崎剛十郎 贈三五、二一
合二一、五 西村清太郎 贈三五、二一 合二四、一一 西川 耕藏 贈三六、二一
合二四、一一 野老山吾吉郎 贈三六、二一 合二四、一一 原田龜太郎 贈四〇、
合二八、一二 橋口戸次郎 贈三一、一〇 合二二、五 蓮田 東三 贈四四、六
合二一、一五 平山 兵介 贈三五、二一 合二一、一五 久富 豐 贈三一、六
合二一、一六 藤村英治郎(次) 贈三一、一二 合二八、一二 藤村 平三 贈三五、一一
合二四、一一 船越 正次 贈三五、二一 合二四、一一 保母 建 贈三五、二一
合二八、一二 松田五六郎 贈三一、一二 合二八、一二 松崎 直臣 贈三一、一〇
合一六、五 宮田 賴吉 贈三一、七 合一六、五 宮田 節齋 贈三一、七
合二四、一一 宮永 計太 贈三五、二一 合二四、一一 水田 謙次 贈三五、二一
合一六、五 安岡 鐵馬 贈三一、七 合一六、五 安岡 勘馬 贈三一、七
合三四、一〇 山 澄 清三 贈三四、八 合三四、一〇 矢崎 要作 贈三一、六
合一六、五 吉本 培助 贈三一、七 合二四、一一 吉田 重藏 贈三六、一一
合二二、五 米川 米吉 贈四〇、五 合二七、一一 渡邊 義助 贈三五、二一
合二一、一六 井川千之助 贈三五、二一 合二一、一五 井關英太郎 贈三五、二一

合二一、五 長野熊之亟 贈三六、二一 合二一、五 那須 嗤一 贈三五、二一
合二四、一一 西山 龜吉 贈三六、二一 合二、一六 能美 平吾 贈三五、二一
合二四、一一 原田龜太郎 贈四〇、 合二二、五 萩谷金次郎 贈四〇、
合二二、五 蓮田 東三 贈四四、六 合三一、五 檜山三之介 贈四〇、
合一六、五 久富 豐 贈三一、六 合二一、一五 藤崎 八郎 贈三一、七
合二一、一一 淵上 謙三 贈三一、一〇 合二八、一二 船田和一郎 贈四〇、
合一五、一一 堀 龍太郎 贈四〇、一一 合二四、一一 堀本 禮造 贈三五、二一
合二八、一二 町田 熊槌 贈三一、一二 合二八、一二 丸山 重吉 贈三一、一二
合二四、一一 宮地 孫市 贈四〇、一一 合二四、一一 宮永 良藏 贈四〇、一一
合二四、一一 三浦吉太郎 贈三五、一一 合二四、一一 森本傳兵衛 贈三五、一一
合一六、五 山本 忠亮 贈三一、七 合一六、五 山田虎之助 贈三五、一一
合二二、五 横山 英吉 贈四〇、 合二二、五 横田清兵衛 贈四〇、
合二四、一一 吉田 太郎 贈三六、一一 合二四、一一 吉田 又內 贈三五、一一
合二一、五 和田小傳次 贈三五、二一 合二一、六 井上 奬助(德) 贈三五、二一
合二一、一五 井手孫太郎 贈三五、二一 合一六、五 小川 官次 贈三一、七

合二一、五 小田 彦三郎 贈三五、二一 合二一、五 小田村信之進 贈四〇、一一
合二一、五 小野 虎之丞 贈三五、二一 合二二、五 小野 金吾 贈四〇、一一
合二二、五 岡見留次郎 贈四〇、一一 合二四、一一 尾崎錡五郎 贈三五、二一

計 五八八 (正三位 一、従三位 一、正四位 五六、従四位 一〇二、正五位 二四七、従五位 一八一)

(祭神中華族の當主及同上子弟姓名)

合二、五 贈正四位中山忠光(侯爵家)
合三八 海少佐、正四、勳四、功四、子 仁禮 景一
合三八 陸步大尉、従四、勳五、功五、子 河田 景延
合三八 陸步少尉、正五、勳六、功五 乃木 保典(伯爵家)
合三九 陸騎中尉、正五、勳六、功五、伯 南部 利祥
合一一〇 陸伍長、従五位 大久保忠良(子爵家)
合三八 陸步中尉、従五、勳六、功五 松平 恒吉(子爵家)
合二九 陸步軍曹、勳五、功七 本多 豐(子爵家)

合二、五 贈正四位丹羽賴德(子爵家)
合三一 陸少將、正四、山根信成
合三八 陸少佐、従四、高崎 元彦(男爵家)
合三八 陸步大尉、正五、勳四、功四 高松 公重(子爵家)
合三八 陸步中尉、正五、勳六、功五 伊東 網九(子爵家)
合一一〇 陸大尉、正五 難波 宗明(子爵家)
合四一 陸騎大尉、正五、勳六、功五 堤 武雄(男爵家)
合三八 陸步少尉、正五、勳六、功五 大迫 三次(子爵家)
合三八 陸步上等兵 鷲尾 五郎(伯爵家)

計 二四

(祭神中將官ノ姓名)

合四〇 陸中將、従三、勳一、功三 松村 務本
合三九 陸中將、正四、勳五、功三 前田 隆禮

合二八陸少將(贈正三位勳三等)大寺 安純 合一一陸少將正四、勳五、男山根 信成 合四〇陸少將正四、勳二、功三見玉德太郎
合四一陸少將正四、勳二、功四伊地知季清 合一一陸少將從四、勳二、功三竹中安太郎
合三八陸少將正五、勳二、功三山本 信行 合一〇陸少將正五、種田 政明 合四〇海中將從三、勳一、功二角田 秀松
合四〇海中將正四、勳二、功二東郷 正路 合四二海中將正四、勳二、功三上村 正之丞 合四一海少將從四、勳三、功三今井 彙昌

計、一四 陸 一〇(中將 少將) 八 海 四(中將 少將) 一 合 六

(祭神婦人姓名)

合一一四 阿久津 梅(茨城) 合一一四 山城 美與(静岡) 合一一四 武田伊賀守妻 人見 延(茨城)
合一一四 矢吹 奈津(茨城) 合一一四 藤田 幾(茨城) 合一一四 贈正四位 山國兵部妻 山國 千惠(茨城)
合一一四 井上 美與(茨城) 合一一四 中村 以保(茨城) 合一一四 贈正四位 山國兵部女 山國 美壽(茨城)
合一一四 田原 千代(茨城) 合一一四 福地 彌壽(茨城) 合一一四 田原 多加(茨城)
合一一四 石原 多免(茨城) 合一一四 田原 喜代(茨城) 合一一四 林 久理(茨城)
合一一四 角田 ヒデ(島根) 合一一四 川内 美岐(北海道) 合一一四 贈從四位 川瀬太郎妻 川瀬 幸(京都) 贈正五位
合一一四 大貫 ツメ(栃木) 合四〇五 土屋 つぎ(岡山) 合四〇五 贈正五位 野村 望東(福岡)
合四〇五 一柳 ツカ(北海道) 合四〇五 三宅 けい(岡山) 合四〇五 鰹 けい(千葉)
合四〇五 柴原 キン(京都) 合四〇五 堀江 タカ(神奈川) 合五〇五 堀 セイ(北海道)
合四〇五 大島 サト(佐賀)

合四〇五 知野 やす(山形) 合四〇五 岩本 サミ(奈良) 合四〇五 大熊 ヨシ(玉埼)
合四〇五 加藤 ふじ(山梨) 合四〇五 田中 スハ(福岡) 合四〇五 河崎 延子(石川)
合四〇五 和田 みつ(三重) 合四〇五 松村 幸惠(高知) 合四〇五 前田 むら(三重)
合四〇五 大塚 虎子(京都) 合四〇五 堀江 トヨ(京都) 合四〇五 若山 ミヨ(新潟)
合四〇五 影山 名世(高知)

計、四二

〔編者云、贈位者將官華族子弟婦人等ノ表ハ參考ノ爲特ニ本編ニ掲載セルノミ〕

祭日

例祭日は多少の變改を經て現今に至れり。明治二年七月兵部省より辨官へ大祭日は正月三日の伏見戰日、五月十五日の上野戰日、同月十八日の函館兵降伏の日、九月二十二日の會津兵降伏の日を以て行はむことを伺ひ、勅裁を經てこの四個日に定められき。而して

同年九月二十一日に例祭を行ひ勅使の御差遣あり。こは定日たる二十二日は天長の佳節に當りしを以てなり。故に辨官より同月二十三日を以て二十二日は天長節に付二十三日に改めらるゝの達ありて以來二十三日と定められき。然るに同年十月に至りて正月三日を主なる大祭日とし、同日に限りて勅使の御差遣及奉幣の事あるべきに定まり、而して五月十五日と同月十八日とは十五日に合せて祭典を執行するも苦しからざる旨辨官の指令ありしも、猶十五日より十八日まで引續き執行し之を一度として年三度の祭典と稱したりしが、明治五年五月の令達にてこの十八日の祭典は遂に十五日に併合せられぬ。斯く三度の祭日中にて正月三日を主とせらるゝ所由は、伏見戰爭は官軍寡勢を以て善く防戰し賊兵を大敗に歸せしめ、維新の基礎を建成せりと云ふにありき。

明治五年大陽曆を頒行せらるゝや、その翌六年二月十八日達に陰陽兩曆を比較して正月三十一日、五月十五日を六月九日、九月二十三日を十一月十二日に改められ、勅使は十一月十二日に限りて差遣せらるゝことゝなれり。然るに其年九月五日の達にて復た更に推歩對照して一月三十一日を一月二十七日、六月九日を七月四日、十一月十二日を十一月六日に變更せられ、同十年十一月五日に至り、西南役に於て記念すべき九月二十四日を大祭日に加ふる旨達せられ、又同日を月並祭日にも加へられき。斯くて年中の大祭は四回となりぬ。而して同十二年社格を附せらるゝや、また更に大祭日を五月六日、十一月六日の二度に勅定あらせたまへり。

斯くてより以來更に變動ある事なし。○按するに、十一月六日は會津兵降伏の日にて維新に際し東西征討の中に就きて最も大功を奏せし日、又一年祭日の終局日なるが故に正祭日と定め給ひしものならむ、而して祭日を春秋二季に定められしは、表彰の意を新にし追慕の念を厚からしめむとし給ふ聖慮に外ならずと察し奉らるゝに當り其相對せる五月六日を以てせられを行ひしが故に、一個月中に四回も擧行せし事ありき。是亦度々の勅裁を經て現今の如く定りぬ。小祭の項參照

（祭日沿革表）

明治二年七月定	同二年九月二十三日定	同五年二月定	同六年一月廿一日	同六年九月定	同十年一月廿七日	同十二年十一月定			
正月三日	正月三日	正月三日	一月廿七日	一月廿七日					
五月十五日	自五月十五日至同十八日	五月十五日	六月九日	七月四日	七月四日	五月六日			
五月十八日									
九月廿二日	九月廿三日	九月廿三日							
十一月十二日	十一月六日	十一月六日							
					九月廿四日				

上表中○印アルハ勅使御差立ノ日ナリ

（明治二年七月十二日兵部省ヨリ辨官ヘノ伺）

大祭日正月三日伏見戰死五月十五日上野戰死五月十八日函館降伏九月二十二日會津降伏毎月祭日九月三日、十五日、廿二日前同斷今般招魂社御取立ニ付前書ノ通祭日ニ相定メ永ク祭典被執行候樣致度此段奉伺候也　七月十七日付指令　五月十五日、十八日約メ候テ十五日ニ致候テモ不苦候事

（明治二年七月二十八日達）左ノ通招魂社三方ノ門ニ高札建候事　大祭日　正月三日　五月從十五日至十八日　九月二十二日　月並祭日　三日　十五日　二十二日依　勅裁如件　二年六月兵部省

（從二年六月至六年十一月祭式祝詞綴拔萃）明治二年九月二十二日大祭式、九月二十一日修清祓、但二十二日　勅使參向ノ儀一日御繰上ケ二十一日ノ由御告有之ニ付二十日夕行之、同二十二日大祭　但前條ニヨリテ二十一日行之

（明治二年九月二十二日例祭宣命）

天皇我大命座須從三位行菅原朝臣修長乎使止爲旦往志七月宮居造利旦鎭米萬都禮留諸靈乃前白給波久止宣留去年乃正月奧利今年乃五月至利旦清久明久建久雄々志支忠心西東乃京又越陸奧北海道志旦大業遂旦失止失奴留盜荒武雄我伴賀良乎恒忘禮給波受偲備思保志食須賀故其我靈乎每年祭夏志

米給布止志旦其最大功乎立都留九月乃二十二日乎祭日止定旦明妙照妙乎奉備利
御酒御饌海川山野乃種々乃物乎置足波志旦齋比祭眞世給布
天皇我大命乎甘良爾聞食世止宣流

（明治二年九月二十二日例祭祝詞）
天皇乃大御詔乎以旦詔賜波久去歳乃正月乃三日爾波伏水役爾奉呂波波臣等乎
拂旦西乃京乎靜米五月乃十五日爾波忍岡爾屯集比旦多和事識留賊乎保布理旦東
乃京乎治米九月乃二十二日爾波若松乃城乎討旦陸奥乎平介今年乃五月乃十八日
爾波宮舘乃塞乎征旦國中悉播清米滿都呂倍果志中爾此四日波殊更爾功乎立叙留
日爾志在禮波後乃世爾偲將行豫止毎歳爾此日乎祭乃日止定米旦齋奉禮止詔賜布
大御詔爾依旦兵部卿嘉彰　齋主止志旦備留御酒波聊乃上高知顯乃腹滿並旦
海山乃物乎横山成積足波志旦祝部等我頚肩爾太襷取掛旦持忌波里造仕奉禮留幣
帛乎捧奉真久乎安幣帛乃足幣帛止受賜比旦　皇我大御代乎常石爾堅石爾守奉旦
幸倍奉旦百乃官人等乎始旦國々乃宰等爾至滿旦已我乖々不令在彌遠爾進奥彌勤
爾勤米令仕奉給倍止白

（明治二年九月二十三日辨官ヨリノ通牒）招魂祭日頃日御屆相成候内九月二十二
日ハ御誕辰ニ付二十三日に可致被仰出候此段申入候也

（明治二年十月神祇官ヨリ辨官ヘノ伺書）招魂社年中三祭日ノ内正月三日ヲ以ヲ
大祭日ト定メラレ可然存候戰死ノ甲乙ハ難付候得共殊ニ此日ノ戰爭賊徒決死ノ
大軍事倉卒に相發シ候處官軍小勢ヲ以ヲ防禦行屆キ賊兵大敗坂府ニモ不得留遠
ク東走致候事ニヲ御一新ノ基ヲ被定候モ此日ニ有之候故殘ル兩日トハ差別相立
勅使被遣御奉幣有之候ヲ可然ト存候　伺之通

（明治五年五月十二日山縣陸軍大輔ヨリ招魂社掛ヘ達）是迄五月十八日祭典ノ儀
自今五月十五日祭典ニ合併執行可致事

（明治五年九月二十三日例祭宣命）
天皇乃大命爾坐世此招魂社爾鎮米萬都禮留諸靈乃前爾式部寮六等出仕正四位
戸田忠至乎使止爲旦白給波久止白佐久前年戰場爾志旦大功乎立志事乎萬代萬旦
爾傳倍給波牟止爲旦年毎乃此月乃今日乃祭乎永例止武官乃人等爾命世旦種々乃
物等乎備奉利齋祭眞世給布此狀乎聞食旦　天皇乃大御代乎動久事無久佐夜久事
無久常石爾堅石爾守幸波倍給倍止宣留
天皇乃大命乎甘良爾聞食世止白須

（明治五年十一月太政官達）今般太陰暦ヲ廢シ太陽暦御頒行相成候ニ付來ル十二
月三日ヲ以ヲ明治六年一月一日ト被定候事但諸祭典等ハ舊暦月日ヲ新暦月日ニ

相當シ施行可致候事

（明治五年十一月十九日達）太陽暦御頒行相成候ニ付祭日左ノ通リ改ム

一月三十一日　舊正月三日　六月九日舊五月十五日　十一月十二日舊九月廿三日

（明治六年一月三十一日例祭宣命）

天皇乃大命爾坐世此廣前爾式部寮七等出仕兼大掌典正三位慈光寺有仲乎使止爲旦白給波久止白左久今年一月乃今日舊暦乃祭日爾當禮留賀故爾武官乃人等爾命世旦種々乃物乎備奉利齋祭旦世給布此狀乎聞食

天皇乃大御代乎動久事無久佐夜具事無久常石爾堅石爾守幸被倍給倍止宣留

天皇乃大命乎甘良爾聞食世止白須

（明治六年二月青山清ヨリ伺）三十一日ニ相當候月次小祭ノ儀小ノ月ハ月ノ終ノ日ヲ以テ執行可仕哉奉伺候也　指令當分伺之通　秘史局

（明治六年三月十八日山縣陸軍大輔ヨリ達）招魂社大祭ノ儀是迄正月三日、五月十五日、九月二十三日ト御定ニ相成候處太陰暦被廢太陽暦御頒行ニ付テハ舊暦ノ月日ニ比較シ自今ハ一月三十一日、六月九日、十一月十二日ト被定候條此旨相達候事

但勅使ハ十一月祭ニ限リ被差出候事（編者云、當記ヲ按スルニ四年迄ハ二年十月兵部省ヨリ申出ノ如ク一月大祭ニ勅使被差遣シテ五年ヨリ九月ニ改メタルカ）

（明治六年三月掲示札　大祭日）一月三十一日　六月九日　十一月十二日　月並祭三十日　九日　十二日依　勅裁如件　明治六年三月　陸軍省

（明治六年九月七日陸軍卿達）太政官第二百五十八號御布達に基き招魂社祭之儀左之通推歩改定候條此段爲心得相達候也　一月三十一日改一月二十七日　六月九日改七月四日　十一月十二日改十一月六日

（明治六年九月掲示札）大祭日　一月二十七日　七月四日　十一月六日　月並祭二十七日　四日　六日　六年九月　陸軍省

（明治六年十一月六日例祭々文）

天皇乃大命爾坐世此招魂社爾鎮座奉留諸靈乃前爾式部權助兼大掌典従三位橘本實梁乎使止爲旦白給波久止白左久前年戰場爾忠旦大功乎立志事乎萬代爾旦爾傳佐給波牟止爲旦今年與利此月乃今日乎永例乃祭日止改正忠旦武官乃人等爾命世旦種々乃物等乎備奉利齋祭旦世給布此狀乎聞食旦

天皇乃大御代乎動久事無久常石爾堅石爾守幸倍給倍止白給布

天皇乃大命乎甘良爾聞食世止白須

〔編者云、以上ノ本項ニ掲グシ宣命及此御祭文ハ例祭ニ宣ヲセラレシモノナレトモ祭日ニ關係スルヲ以テコヽニ掲グ〕

（明治九年十月三十一日協定）陸軍省第一局ヨリ海軍省ニ照會協議合意シタ例大祭日時限ヲ治定シ一月二十七日午前第九時トシ十一月六日ヨリ改定

（明治十年十二月掲示）大祭日　一月二十七日　七月四日　九月二十四日　十一月六日　月並祭　四日　六日　二十四日　二十七日依　勅裁如件　明治十年十二月　陸軍省　海軍省

（明治十二年五月三日陸軍卿ヨリ太政官へ伺）招魂社祭典ノ儀ハ年々四度ノ大祭アリテ其待遇甚厚キガ如シト雖モ或ハ然ラサルモノアリ何トナレバ伏見戰死ノ靈魂ハ一月上野戰死ハ七月西南役戰死ハ九月若松戰死ハ十一月佐賀及臺灣其他ノ役ニ於テ戰死セルハ右四度ノ祭日ニ合祀相成居候儀ニ付各靈魂ニ對シ神慮ヲ享ケシムル唯一回ニ過ギザルナリ仍テ今般大祭日ヲ廢セラレ自今更ニ毎年五月六日、十一月六日兩度ノ大祭幷毎月六日月次ノ小祭ヲ行ハセラレ各靈魂ヲ合祀相成候得者厚キ御待遇ノ御主意ニモ適ヒ可申尤モ勅使ノ儀ハ十一月ノ祭典ニ限リ參向相成候樣致度此段相伺候也　指令　伺之通　六月四日太政大臣

（明治十二年六月十四日達甲第十號）東京招魂社ノ儀今般靖國神社ト改稱別格官幣社ニ列セラレ候ニツキ來ル二十五日臨時祭典行ハセラレ爾後祭日左ノ通被相定候條此旨相達候事　五月六日　十一月六日　內務卿伊藤博文　陸軍卿西鄕從道　海軍卿川村純義

（明治十二年六月掲示札現時ノ分）大祭日　五月六日　十一月六日　小祭日毎月六日依　勅裁如件

社地

明治二年本神社造營の議起るや、田安臺○九段坂上の舊名は宮城の乾に位して高燥の佳域なりとて竟に祠を此地に建立することに決し、同年六月十二日軍務官副知官事大村益次郎以下五名○人名は起源の項にあり出張して其地を定め、富士見町一丁目、二丁目、三丁目、一番町及飯田町一丁目の一部の地を劃して社域となし、同月十九日を以て東京府よ

り之を受領したりき。これ所謂繩張内にして其規模頗る廣大なるものなりしが、翌三年十一月に至り一番町、富士見町一丁目の全部及二丁目の地を割きて賣却するに至り大に其面積を減ずるに至れり。今にして之を思へば遺憾極まりと云ふべし。○初め此地の廣大に失するを難じたるものありしに大村氏云く、今は廣大なるが如きも數年の後には狹隘を感ずることあらむ、彼九段坂の如きも馬車を驅るに足るべき斜面の坦路たらしめざるべからずとて自ら其設計に從事されたりと云ふ、然るに後買地のことあり、現今にしては例大祭に各兵の拜式及人民の報賽絡繹絕たず社域狹隘にして危險をさへ感ずることあり、況んや臨時大祭の擧ある時に於てをや。而して同十一年六月飯田町一丁目○牛ケ淵の地四千七百餘坪を買收し、猶其隣地なる千百餘坪の官有地を合せて本神社の附屬地に定め同十四年三月同町九段坂南側の地○現今近衞記念碑の建立せる地なり百餘坪をもまた附屬地とせられ地積大に增加するに至りしも其廣袤猶舊態に及ばざること遠し、況して同三十八年四月市街電車鐵道敷設のことあるや、社域西南隅○宮司官舍角より、舊馬場に沿ひ通して南側の地一千三百七十一坪三合三勺を引退き、同四十年三月市區改正によりて牛ケ淵附屬地の內九段坂側百七十一坪六合、及び淸水門角より九段坂下十字街角に至る七百十八坪九合八勺の地を東京市へ還附し、猶同年百三十坪七合二勺を割きて市街鐵道の專用軌道敷地に充つる等の事ありて、再び其地域を減ずるに至りぬ。然れども現今尙域內○四至の基石より算す、祭日勅裁揭示場を加ふ。一萬七千五百五十五坪九合八勺舊馬場一萬零二百六十三坪一合九勺、近衞記念碑敷地四十九坪二合七勺、偕行社敷地千六百三十二坪四合二勺、牛ケ淵附屬地四千八百六十七坪九合七勺等總地積三萬四千三百六十八坪八合三勺を有せり。○但、この坪數は現今實測せる所の地積なり、

域内の地は、舊幕士の邸宅なりしを、明治五年神殿再建に際し表四番町通（○舊町名）を廢して一區域とし、地を均らし土を替へて社地と定めしなり。舊馬場の地は、もと空地にして西方の小部分は馬場（○此所にて犬追物を行ひしと云ふ）、東方の大半は歩兵屯所の置かれし地なりき。明治五年此地に（○中央より少か西方の地）建營ありし假神殿を現今の域に遷座せらるるや、之を競馬場に定め中央に楕圓狀の土堤を築きたりしも、同三十四年に至り之を廢止して漸次神苑に改築することゝなれり。初め此地に神殿の建營ありし時は、富士見町一丁目、二丁目、三丁目、一番町等の地を神苑となし一大社域となさんとの計劃なりしと云ふ。以て其規模の大なりしを想ふべし。偖行社の敷地、亦舊幕士の居宅にして本神社創建に際し招魂社御用掛の出張所たりしなり。（○明治十年之を偖行社へ貸與す）牛ヶ淵の地は同十二年民有地を買得し之に官有地を合せて本神社非常時の御立退地に定められたるなり。これを社地に於ける梗概とす。（○委曲尙參照欄に云ふべし）

（明治二十四年四月二十七日營第七八號近衛經營部ヨリ宮司ヘ引繼書）靖國神社境内並附屬地共地所御引渡之義有之候ニ付別紙之通御引渡ニ及候間右ニ對スル受領證御差越相成度候也

〔別　紙〕

麹町區富士見町三丁目一番地面積一萬七千七百四十三坪九勺五才（但域内）
同　區同　町二丁目十八番地面積一萬一千二百八十八坪一勺（但舊馬場）
同　區飯田町二丁目五十二番地面積千六百五十九坪六勺五才（但偖行社地）
同　區同　町一丁目（自十一番地至廿番地）面積五千六百十三坪五合七勺一才（但牛ヶ淵）
同　區同　町一丁目番外一番地面積百二十四坪一合一勺五才

〔編者云コノ外富士見町一丁目三十九番地（舊憲兵附屬地）ニ面積三百坪ノ地アレトモ後ニ陸軍省ヘ還附セシヲ以テ除去セリ〕

（東京府官有地臺帳抜萃）

富士見町三丁目一番地別格官幣社地三萬二千七百三十九坪四合八勺五才

右明治三十八年四月十四日六百三十三坪一合六夕ヲ道路敷ニ組替ヘタル差引殘地

富士見町二丁目四十八番地別格官幣社地一萬五百三十七坪二夕

右明治三十八年四月十四日七百三十八坪一合七夕ヲ道路敷ニ編入シタル殘地ナリ

飯田町二丁目五十二番地別格官幣社地一千六百五十九坪六勺五才

右靖國神社附屬地

飯田町一丁目十一番地ヨリ廿番地マデ別格官幣社地五千二百十坪四合四勺五才

右元陸軍省用地ナリシカ明治十一年六月靖國神社附屬地ニ編入

飯田町一丁目九段坂南側堀端土手敷別格官幣社地百廿四坪一合一勺五才

右明治十四年三月靖國神社附屬地ニ定メラル

（明治十一年二月十五日山縣陸軍卿ヨリ牛ケ淵地所買收ニ付工兵第一方面本署ヘ達）送第五百二十八號飯田町一丁目別紙略圖之地所招魂社附屬地トシテ當省所轄之見込ヲ以テ買收之儀取調何分可申出此旨相達候事

（同十一年四月十九日工兵第一方面本署ヨリ牛ケ淵地所買收ニ付取調上申書）送第五百二十八號十二月十五日御達ニ基キ招魂社隣接飯田町一丁目地所該社附屬トシテ本省所轄之見込ヲ以テ買收之儀所有主ニ遂示談取調候處別記之通有之買收ノ上ハ牛ケ淵公道幷清水門前空地官有ノ分共別紙圖面朱線内ヘ總體圍込候樣致度右邊併テ該府ヘ協議候ニ總テ差障ノ筋無之其代價ニ至テモ相當之趣ニ付御買上相成可然ト存候且亦該地之内ニハ所有者共ニ於テ多分ノ借家等取設有之月々多少ノ利益ヲ占メ居候處今般買上可相成ニ付テハ豫テ借住ノモノハ逐次移轉ノ見込又借用ヲ望ミシ者モ條約相解候樣ナル事情モ有之買上遷延候得者自然苦情モ相生シ代價ヘ差響キ候哉ト相考候間右邊御酌量迅速御買上ノ順序相成候樣致度別記圖面共相添此段申進候也

土地買上事由　招魂社附屬地用

總地積　五千六百七十三坪九合四勺五才内四千七百四坪八勺民有千百八十坪三合一勺五才公有

買上地價　金一萬四千百三十圓二十二錢

建物樹木石其他買上代　金二萬四百二圓五十六錢二厘

建物移轉料　金二千四百八十二圓三十九錢六厘

（明治十一年五月二十八日山縣陸軍卿ヨリ牛ケ淵地所買收ニ付三條太政大臣ヘ伺）

府下第三大區四小區飯田町一丁目七、八、九、十番地民有地別紙圖面内面積四千七百四坪八勺之ヶ所今般當省ヘ買收招魂社附屬トシテ需用致度ニ付隣ヲ内務省ヘ及協議候處差支無之旨回答申越候條官有地第一種ニ編入當省ヘ受領致度圖面相添ヘ此段相伺候也　伺之趣聞届候事　明治十一年六月三日

（明治十一年六月二十七日東京府ヨリ牛ケ淵地所引渡ノ件工兵第一方面本署ヘ照會）府下第三大區第四小區飯田町一丁目七、八、九、十番地民有地四千七百四坪八勺現ヲ御照會ノ通地所家屋等代金三萬七千十五圓十七錢八厘ニテ御省ヘ御買收相成候ニ付官有地第一種招魂社附屬地トシテ御引渡候樣内務省ヨリ達有之候依テ來一日午前第九時晴雨ニ不拘現場御引渡候條受取官員同處ヘ御差出相成度此段及御照會候也

〔編者云以上ノ四文書ハ牛ケ淵買得ニツキ必要書類ナレバ特ニ掲載セリ、猶同地ニツイテハ明治十二年二月六日伊藤内務卿ヨリ官民有地需用ニ付キ道路圍込ノ件ニ對シ場所交換ノ交渉アリ、同年三月七日工兵第一方面提理ヨリ新道開設費三百六十九圓五十錢別途支出ノ件ヲ伺出デ、同五月三十一日西郷陸軍卿ヨリ飯田町一丁目堀端道路地面積九百六十九坪八合六勺五才ト、招魂社附屬地ノ内面積四百六十三坪五合ノ個所新道開設ノ上交換シ、舊道路ハ招魂社附屬地トシテ官有地第一種ニ編入當省ヘ受領ノ義今般太政官ヘ伺濟ニ付該地所受領致スベキ旨達セラレ、同年六月十日相互交換引渡ヲ了セリ、同二十二年市區改正設計ニヨリ公園ニ編入セラレタリシガ、同三十六年二月二十四日陸海軍兩大臣ノ意見ニヨリ閣議ニ於テ公園地ヨリ除去スル事ニ決シ、同年三月省議ニテコノ地域ハ清潔ニナシ非常時ノ御立退トシ、其一部ヲ神社ニ關係アリテ設備不體裁ナラザルモノニ貸與ヲ許スコトニ定メラル、同三十七年二月地均ヲ行フ、同卅九年十二月十九日境界査定並ニ界標建設ノ旨御料局ヨリ通牒アリ、仍テ同月廿二日立會ノ上境界ヲ定ム、牛ケ淵ハ土堤敷石ヲ以テ界標トシ其他ハ杭ヲ立ツ、其區域ハ田安門前ヨリ牛ケ淵ニ通ジテノ範圍ナリ、同四十年二月十三日東京府知事ヨリノ神社附屬地ノ一部ヲ市區改正道路敷地ニ供用方照會ノ件認可アリ、同年三月二十五日同附屬地連續塀築造ニ着手同年十二月卅一日竣工ス、延長二百十八間費用六千六百四十七圓九十錢

此地ヲ貸與ノコトハ、同十六年二月以來數回ナリ、同卅七年六月九日日本體育會ヘ貸與期限滿期ノ處更ニ八月一日ヨリ繼續シ、同年同月愛國婦人會ヘモ貸與シ、（爾來兩會ヘハ地域ハ多少ノ增減アレトモ現今ニ至ルマデ繼續貸與セリ、）同卅九年一月廿二日市街鐵道株式會社長雨宮敬二郎出願ニヨリ牛ケ淵ハノラマ館廢止トナル、同八月市街鐵道株式

會社へ百三十坪七合二勺ヲ貸與セリ、

社域及舊馬場ヘ明治廿二年東京市告示第三十七號ニヲ富士見町公園ト豫定公布シ同三十六年三月卅一日告示第卅六號ニヲ其面積ヲ二萬七千五百坪トセリ而モ更ニ着手ノコトナク多額ノ植樹ヲナシ四十三年度ニ於ヲ金二千四百餘圓ノ砂利ヲ敷キヲ社道ヲ修理シタリ抑公園ハ公衆ノ逍遙遊覽スル所ニシヲ神苑ノ神靈ノ爲ニ築造スルモノト其趣ヲ異ニスレバ宜シク之ヲ神苑トナサヾルベカラズ」

（明治十年二月建物ヲ僧行社へ貸與ノ件東京僧行社歷史抜萃）私共此度同志ノ者申合セ士官集會所設立仕度ニ付九段坂上招魂社役場右爲集會所拜借仕度尤御用ノ節ハ何時モ返上可仕候條御許可被下度此段相願候也

追而本文御許可之上者同所備附之椅子等モ當分拜借仕度候也　指令　願之通

但引渡方工兵第一方面本署へ相達候事

（東京僧行社へ地所貸與ノ件）麹町區飯田町二丁目五十二番地面積千六百五十九坪六勺五才ヲ明治二十二年二月東京僧行社幹事長桂太郎ヨリ願出同月十八日ヲ以ヲ五十ヶ年限無料貸與ス

（明治三十九年五月二十一日神社ヨリ僧行社へ通知）一、地坪千六百五十九坪　一、

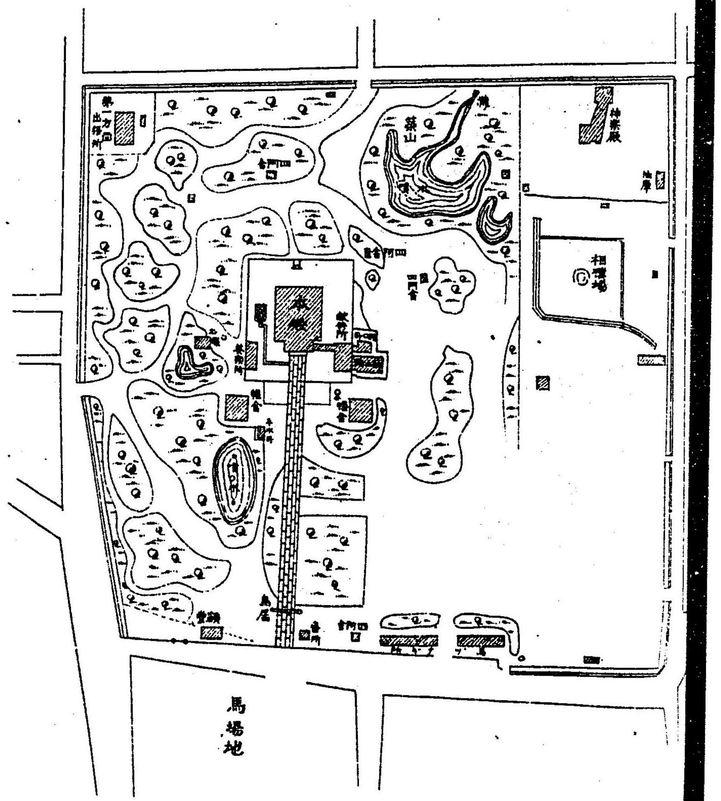
明治二年六月社域劃定圖

此圖は嘉永三年新刻安政五年再刻明治三午歳改正景山致恭著江戸麹町六丁目金鱗堂尾張屋清七板とある圖に據る

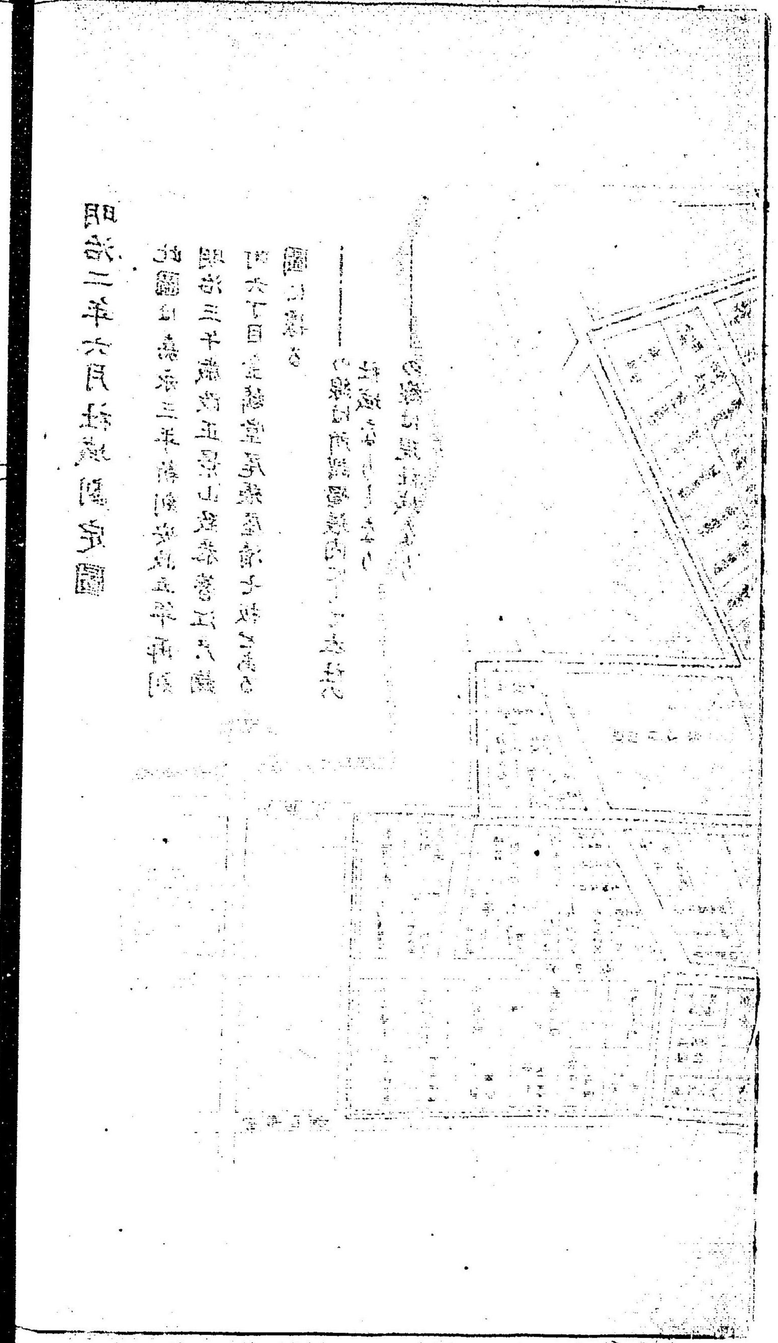
――――の線は所謂繩張内にして本社の社域なりしなり

――――の線は現社域なり

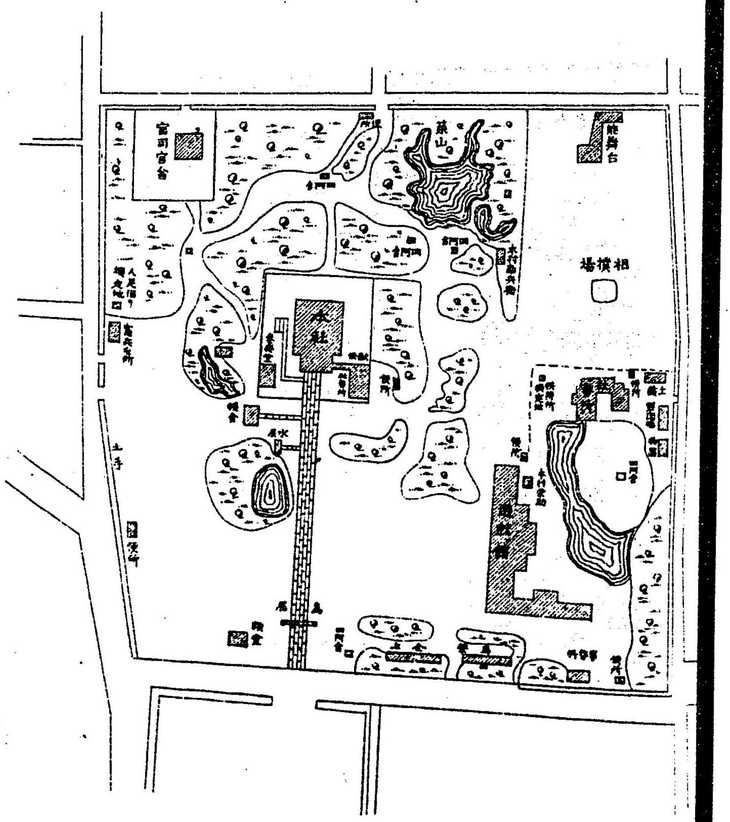
明治十三年域内圖



明治二十六年六月境内圖

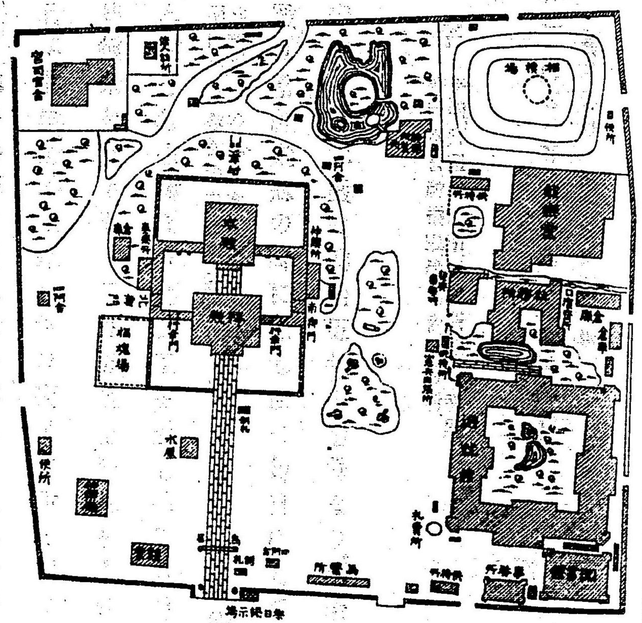


明治廿八年域内圖



明治廿八年域内圖

明治四十三年現在圖


練兵場
射的場
水槽
水槽
射的場
練兵場
射的場
水槽
水槽
練兵場
射的場
水槽
水槽
練兵場
射的場
水槽
水槽

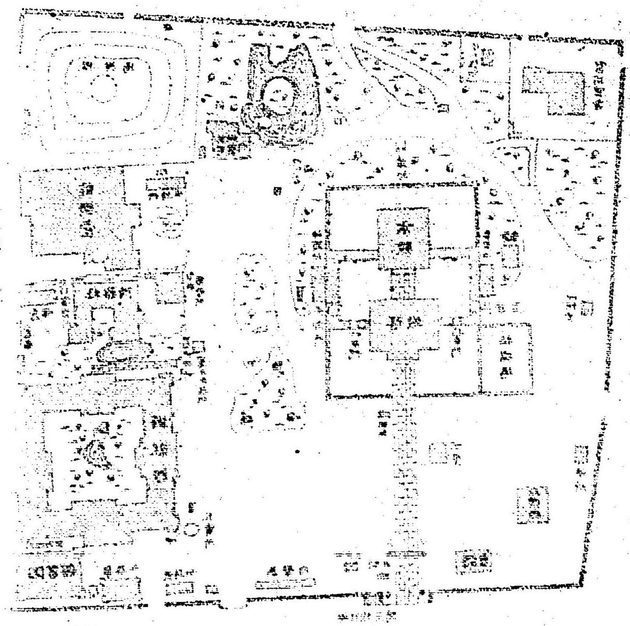
高燈籠一個　一基見燈籠一個　一周圍石垣

右之通靖國神社ノ所有ニ有之候間此段及御通知候也

殿宇

本殿、拜殿、神饌所、奏樂所、廊、行幸門、神門、水舍、神樂殿、繪馬舍、社務所、

本殿　神靈を奉安せる本殿は明治五年の造營なり、明治二年六月造營せし舊本殿は當社創祀の時に際し、假に旬日にして建設せし板葺の假宮、○其圖起原の部に有り、今の大村兵部大輔銅像の東數間の處に建設せしなり、なりしかば、明治三年改營の議を決し、木材を名古屋より運び工を起し同年六月一日現今の地を相して地鎭祭を修め、五年二月五日上棟式を擧げ、同年五月七日遷宮式を行ふ、其構造、神明造に倣ひ葺くに銅を以てし千木を擧げ勝男木を置く、内中外陣に區し緣を回らす正階十級あり、○緣及階段は



其後腐朽せしにより、四十年三月改修を企て翌四十一年十月成れり。後三十四年十月、殿の左右に廊を架するに至りて益莊嚴を加ふるに至れり（○建坪六十五坪七合餘）

拜殿　明治二年の假拜殿は實に十數坪の建築に過ぎざりき。同五年本殿造營の時も未だ拜殿に及ばずして、後に漸く假拜殿改築の事ありしも是亦規模甚狹小なりしを以て、明治三十二年八月二十日起工奉告祭を行ひ、同三十三年五月十三日立柱祭、同十月十七日上棟式、同三十四年十月五日竣工奉告祭を執行して今の拜殿を完成せり。當殿は千木勝男木の設なきも四方に緣を回らし所謂寢殿造にして結構頗る雄偉なり。この造營費拾六萬餘圓の中へ國庫より特別寄附金五萬貳千圓の交附あり。（○建坪五十五坪零七）

神饌所　舊神饌所及舊奏樂所は明治五年五月神殿と共に造營せられしものにて規模甚少なりしが三十二年拜殿と同時に工を起し三十四年十月五日竣成奉告祭を行ふ。其後狹隘を感じ三十九年二月增築せり。（○建坪二十八坪二合六勺）

奏樂所　神饌所と同時に起工して幾はくもなく竣成したり。（○建坪十九坪一勺）

廊　左に神饌所あり、右に奏樂所あり、前に拜殿あり、是の左右に亘りて本殿より廻廊を架す。拜殿と同時の造營なり。（○建坪三百五十九坪二合八勺）

行幸門　拜殿の左右に在り、拜殿と同時に造營す。行幸の時南門より入らせ給ひ北門より出でさせ給ふ。仍てこの名あり、常には之を鎖す。

表神門　又中門と稱す拜殿の正面にあり、拜殿と同時の造營なり

しが四十一年之を改築せり.左右に玉垣を回らして廻廊に接す.
裏神門　本殿の後方にあり.拝殿と同時の造營なり.左右に瑞垣を廻らして本殿に接す.
水舍　中門外右傍に在り.拝殿と同時の改築なり.〇建坪二十坪四合
神樂殿　水舍の後方に在り.元と能樂堂なりしを明治三十六年十月此處に移して修造し之れを神樂殿とす.舞臺を廻りて縁あり.高欄を附す.小祭以上の祭典には必ず此に里神樂を催す.〇建坪十坪七合八勺
繪馬舍　神樂殿の東北に在り明治十一年の造營なり.〇建坪十五坪
社務所　舊社務所は五年二月の建築なりき.現今の社務所は二十九年六月十日地鎭祭を行ひ同年十二月二十五日落成し三十年一月九日新室祝を擧ぐ.〇建坪六十八坪三合四勺　土藏.物置等之に附屬す.社務所の

門と並びて祭典事務所.〇木造洋館二十四坪あり.三十九年二月の建築にて大祭執行の際.陸海軍祭典係員の事務を司る所とす.また同附屬舍あり.〇五坪合尙此外多くの建物あり.〇本項には神殿に關するものゝみを載す.雜戰諸建築の部參照すべし

（明治五年正殿棟札寫）

表
東京府内九段坂上第三大區小四區
招魂社　正殿　一宇　從四位兵部大輔山縣有朋
干時明治五年歲次壬申二月五日　正五位兵部少輔川村純義
正五位兵部少輔西郷從道

裏
正六位兵部少丞石井謙吉　兵部大錄　高柳邦秀
正七位陸軍中佐小澤武雄　兵部大錄　佐藤金義
正七位　楠目正幹　兵部中錄　松岡重信
兵部中錄　靑山清
（餘者不遑枚擧因而略之）

（創立以來收支計算書拔萃陸軍大臣官房軍吏編纂）明治二年六月九段坂上ニ招魂場小社建設及同五年現在ノ本社建設ノコトハ書類ニヨリ判然セシモ其建設費用ニ至リテハ明瞭ナラズ察スルニ別途金ヲ以テ支辨シタルモノナルベシ

（會計簿拔抄拜殿營繕費）一金十六萬七千五百十一圓九十五錢八厘右ハ自三十二年六月二日至三十四年十月廿九日拜殿造營ニ關スル總支出金高ナリ、コノ中國庫ヨリ五萬二千圓ノ交附アリ工事請負人ハ清水滿之助ナリ

（拜殿造營委員長及委員明治三十一年四月十二日任命）委員長陸軍少將大藏平三　委員宮內省技師木子清敬　陸軍監督補小暮滂太郎　陸軍一等軍吏石井要　海軍技師北澤虎造　靖國神社宮司賀茂水穗　陸軍技師宮崎嘉積

（會計簿拔抄社務所建築費）一金四千百七十圓

社領

明治二年八月、祭祀の爲めに永世高壹萬石を附せらるゝ旨御沙汰あらせられしも、當時未だ國庫充實せざる際なれば思召のほどを察し奉りて、同年十二月右高の內當分五千石を返上することを願出で、爾來殘額五千石を以て社費に充てたり。然るに、同九年四月に至り當分減額の高により、寄附米を金圓に換へて寄附金と稱し、年年七千五百五十圓を附せらるゝ事となりて爾來現今に及べり。思ふに我國勢大に張り本神社も亦舊態にあらずして祭神の遺烈を發揚する遊就館あり、圖書館あり、神慮を奉慰する能樂堂あり、神樂殿あり、其他萬般の施設、僅指するに堪へず。然るに其經費の當分寄附金の名稱にて未だ復舊せられざるが如しといへども、今や祭神の威靈赫々として輝き皇室の御殊遇常へに替ることなく、國民の崇敬亦日々に敎きを致す。何をか之に加ふるもの有らむ。さればにや明治二十七八年役以後に於ては合祀大祭の行はるゝ毎に特別寄附金として國庫より其祭資を支出せらる。（明治十年西南役戰死者合祭に當りて特に壹萬零五百七十餘圓の交附を受けしことあり、）

これ單に禮典を完うして遺憾なからしむるの主

旨なるべし○特別寄附金の項參照すべし抑本項は寄附金と題してこれらの特別寄附金をも合せ掲ぐべきが如しと雖も社費と臨時の寄附金とは自ら異なれば、舊稱を襲ひて社傾とし特別寄附金の項をば別に掲出せり、

（明治二年八月廿二日太政官御沙汰）招魂社高壹萬石爲祭祀永世被宛行候事

（同年十二月十九日兵部省ヨリ太政官ヘノ願書）招魂社ヘ高壹萬石被宛行候處即今大藏省頗ル切迫ノ旨追々致承知候就テハ會計御目途相立候迄右高ノ内五千石返上仕度此段奉願候也　指令　願之趣聞屆候事

（同九年四月二十日太政大臣ヨリ陸軍省ヘ達書）招魂社寄附米ノ儀當分減額ノ高ニヨリ本年七月以降金額ニ改正年々金七千五百五十圓可下渡候條以來寄附金ト改稱可致此旨相達候事

鳥居

鳥居は神社の設備として缺くべからざるものゝ一なり、本神社に在りては明治五年二月五日本殿上棟式の擧行ありてより、其翌六

定為高

祭資永

壹萬石

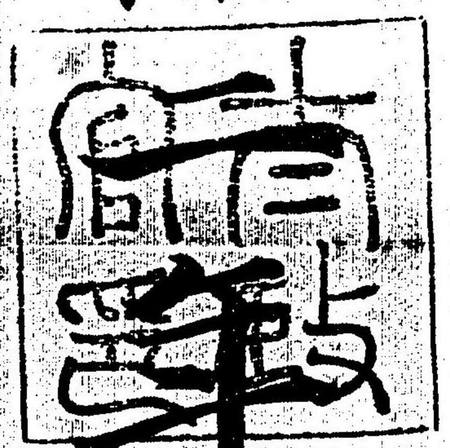
世被

祀社

魂

高為壹萬石
祭資永
行候事
被

宛

明治

年
八月廿二日

年一月始めて之を建設し同月二十八日竣工奉告祭を行ふ。これ最初のものなりしが、十有餘年を經て腐朽し漸く危險なるに至りしかば、同十七年八月之を除き、更に同年青銅鳥居の建設を計畫し、同二十年十二月其工事を落成せり。初め再建の議起るや、關係の各官相議して曰く、本社は、王政の中興を翼贊し今日の昌平を開創したる神靈の祠にして、國家の永遠敬崇して忘る可からざる所なれば鳥居の如きも宜しく其規模を壯大にして以て萬世不朽ならしむべしと。斯く議定まりて模範を古制に則り高さを五十尺となし、材料を青銅と定め、○此青銅は舊藩より還納せし砲礮を用ゐしなり、大阪砲兵工廠反射爐に依りてこの未曾有の大工事をば竣成せりき。○當時此反射爐に依るの外此工事に充つべきものなかりしなり、乃ち同工廠は、製砲所の反射爐に據り假りに鑄工場を設け、同十九

年七月十八日に起工し、同二十年七月二十日に竣工せしかば、同年九月二十八日攝州目標山を發程し海路之を運搬して同十月十三日品川灣に着せり。仍て同月より建立の工事に着手して同年十二月之を了し、同月三十一日を以て落成式を擧げ奏告祭典を行ひき。

そもく、この工事に對しては皇室より金壹萬五千圓の御下賜ありて、總費額實に金壹萬五千九百貳拾參圓餘に上れり。斯くて巍然たる青銅の大鳥居は社前に屹立して、不變の壯容萬人の仰視する所となり、祭神の威名と與に千歲に不朽なりと云ふべし。

（青銅華表之記抜萃）青銅華表建設事務關係各職員　陸軍大臣參議定官陸軍中將從二位勳一等伯爵大山巖　同次官總務局長陸軍少將從四位勳三等桂太郎　陸軍省會計局長陸軍監督長從四位勳二等川崎祐名　大坂砲兵工廠提理陸軍砲兵大佐從五位勳三等牧野毅　陸軍省總務局第四課長陸軍歩兵大佐正六位勳三等沖原光孚

同第一課長心得陸軍歩兵少佐從六位勳四等清水俊　海軍省軍務局法規課々員海軍少佐正七位勳六等植村永孚　陸軍省總務局課員陸軍歩兵大尉正七位勳六等西川政成　同吉村貞白　青銅華表製造工事指揮大坂砲兵工廠監督陸軍砲兵大尉正七位山田健　工事擔當員陸軍砲兵監護角田儀雄　陸軍砲兵鑄工長常喜秀五郎　同那須野金藏　同寺田伊之助　同森山盛行　同製圖者　陸軍六等技手柳丈太郎

（青銅華表之記抜抄）

二柱中心距離三十八尺　地平ヨリ貫ノ表面下部ニ至ル高サ四十六尺六分　笠木ノ長サ十六尺七寸　貫ノ長サ上部ニ於テ三十三尺九寸　柱ノ長サ四十六尺　全高五十三尺八分

神苑

神慮を慰めまつる爲めに、苑池を築造するは上古よりの制なり。是れ崇敬の至情にして、敦厚なる我國俗の然らしむる所なるべし。明治二年本社創建の設計書に據るに、梅林、松林、櫻林等あり、又花壇あ

り。明治十四年の頃までは泉池四個所ありしを、遊就館設立の爲めに或は境趣變更の爲めに三個所は廢して今只一個所を本社の後庭に殘せり。其規畫大ならずと雖も清泉の涌ふる所魚淵に躍り、奇岩の横はる所文龜遊ぶ、況して懸瀑は冬ならずして雪を飛ばし、噴水は雲なきに雨を起し、知らず知らず人をして其心を洗はしむ、而して苑内を逍遙すれば觀賞を偕にすべき亭あり、便榻あり、また新聞縱覽所の設あり、祭典の餘興に資する相撲場あり、樂殿あり、祭神に最緣由ある武に於て遊就館あり、文に於て圖書館あり、諸樹蒼蒼の間には二十七八年三十七八年兩役戰利巨砲の參差隱見するありて、此れら悉く賽者の目を惹かざるはなし、殊に陽春櫻花爛漫の季の如きは都下人士の喧傳歎賞する所にして、自ら、花は櫻木人は武士、と謳はしむも亦むべなりと云ふべし。

瑞垣内に明治三十八年五月閑院宮載仁親王殿下御手植の月桂樹あり、域内瀟洒俗塵絶滅、詣者をして覺ねず襟を正さしむ。

社務所の庭園は明治四十一年の改築にして規模小なれども雅致饒し、遊就館の内庭亦善く自然を縮收して妙趣津々たり。庭中に北韓大捷碑を建つ、去つて九段坂頭に至れば高燈籠、近衛紀念碑、大村兵部大輔の銅像、等あり、坂を下つて右折すれば卽ち當社の附屬用地牛が淵にして又二三の碑石紀念物散在配置せらる。其名の起る牛石は永く此地の主たるが如く其中央に在り、凡そ坂上坂下眼底に映ずるものは或は懷古の情を喚起せしめ或は正氣を鼓舞せしむ。是れ本神社神苑内外の大觀なり。

（明治二年六月十三日軍務官ヨリ行政官へ差出書）招魂場取建甲印ハ卽今小社ナリトモ相營ミ今年祭禮取行候事　乙印ハ花壇　丙印ハ梅園　丁印ハ本社其外

乙丙丁ノ三ハ卽今手ヲ付候譯ニハ無之漸々年ヲ經候テ取行候事　○此圖略ス
（明治七年一月引渡新築個所）一富士見町　土壘但シ樹木植直シトモ　一擔棒ノ
道　一西洋形燈籠四十本　一左右入口小土手　一競馬場　一同所手摺　一幄屋
手摺　一社司詰所　一裡四番町道土壘　一西洋圍西ノ方　一相撲場井戸　右喜
成引渡シ申候也
（日記抄錄茶店ノコト）茶店ハ明治十三年七月境内ニ設置スルコトヲ許可シ後三
十八年當馬場ヘ露店ヲ出ス三十九年以後一切廢止セラル、

招魂場

招魂場とは神靈を正殿に鎭祭するに先だち豫め招き奉る齋庭の名なり。明治二年六月當社創立の際には別に齋場を設けず直ちに新殿に招齋し、七年八月第二回○二年六月の鎭祭を第一回とするが故に今回を以て第二回とす合祀祭に至り始めて齋場設立の制を定められ、以來該祭執行の都度必ず取設けられたるものにして、其位置概ね今の神樂殿の側なりしが、同三十六年拜殿の右側に沿へる地を相し、不易の齋場を築定せられ、同三十八年五月の臨時祭より以後、この典儀は毎に此所に於て行はれぬ。而してその式場は明治七年の制によるに、縱十五間、橫八間の地域に淸砂を布き、間毎に葉付の竹を樹てヽ垣を作り、正面に高さ一間半の鳥居を設け、其內に檜の黑木を以て二間四方の板屋を構へ、更に假宮を奠きて靈璽を奉安せり。これより以來凡そこの結構に準據したりしが三十八年に至り更に板葺を萱葺となすなど、神壇一層の莊重を加へ、神職、掛官其他樂隊の幄舍及鳥居等をも悉く一新し、その神輿の如きも帝室御下賜の御羽車を以てして、靈光益發揮するの想あるは欣すべし。而してその眞榊庭燎等の配置儀

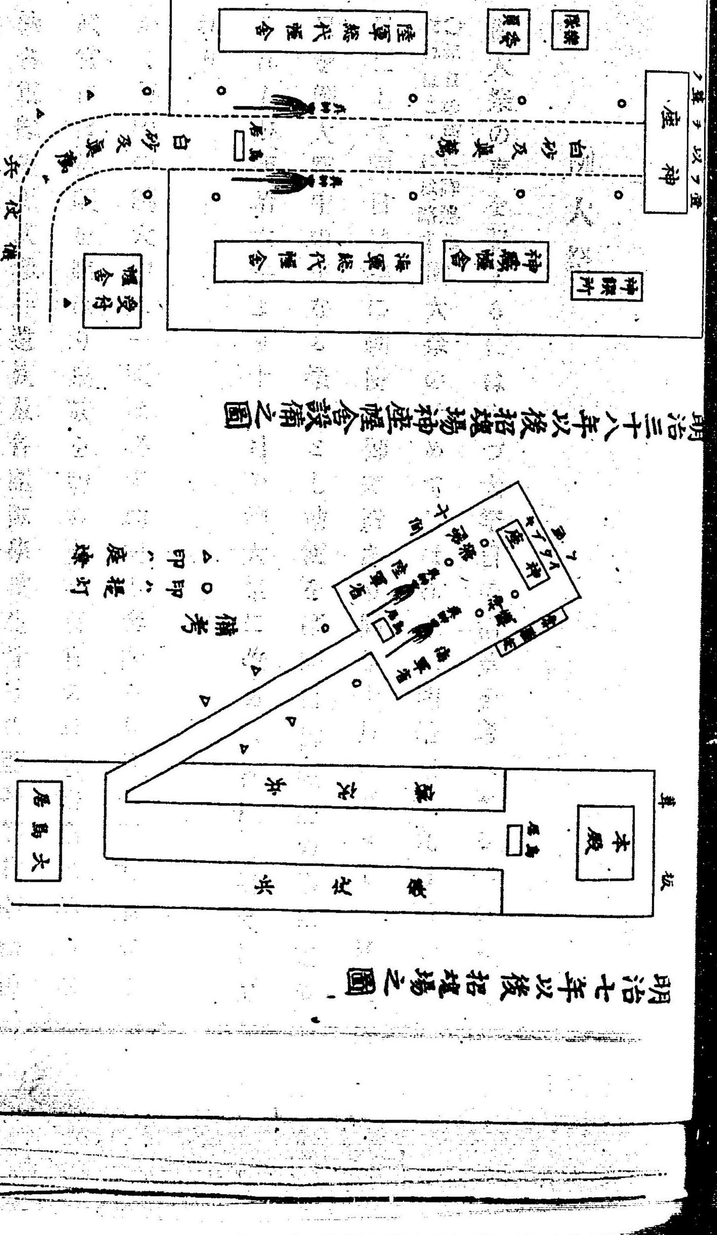
仗兵警邏等の儀容は、前後を通じて變る事なし。

（明治七年八月招魂祭々式披萃）招魂場　靈屋ハ縦横二間檜ノ丸大柱ニテ埋立ナリ屋根ハ板葺ナリ靈祠ハ假ノ宮造ニシテ縦横三尺高サ三尺　外圍ハ青丸竹長一間ニシテ菱目ニ結廻ス　但シ二間毎ニ葉付竹ヲ立ツ　華表ハ高サ一間半巾之ニ應ス檜ノ丸木ニテ造ル　太玉串ハ杉ノ細丸太長サ三間半　神饌所縦横一間板圍屋根ニテ覆フ内ニ棚ヲ附ク燈ハ高サ四尺　場中ニ濱砂ヲ敷クナリ

（明治八年二月十七日陸軍卿ヨリ工兵第一方面ヘ達）臺灣蕃地ニ於テ戰死ノ者本月二十二日招魂祭ニ付同廿一日招魂式施行候條其方面ニ於テ招魂場取設方可致此旨相達候事

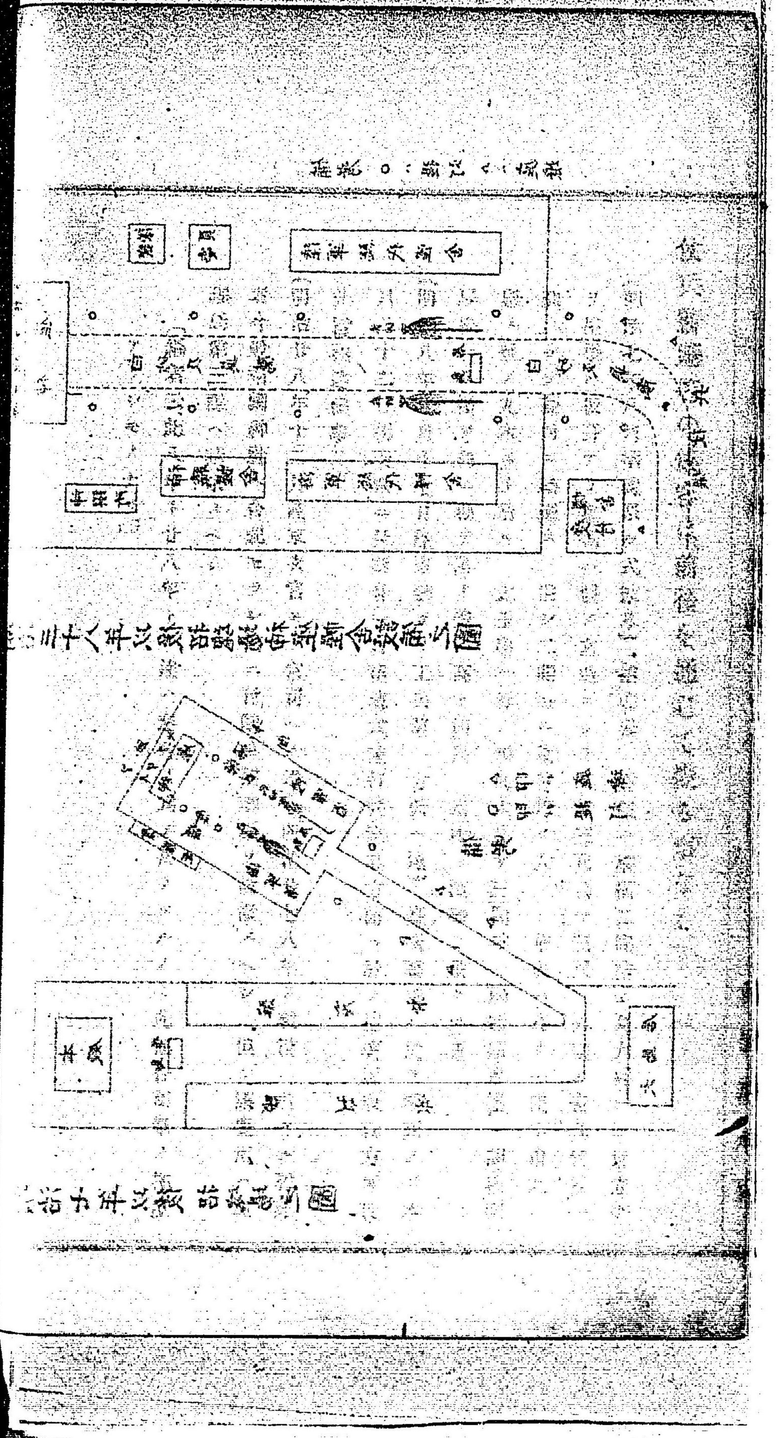
（明治廿八年十二月陸軍次官ヨリ宮司ヘノ達）明治廿七八年ノ戰役ニ於ケル戰死者今般靖國神社ヘ合祀セラレ候ニ付臨時招魂場ヲ設置スヘシ　但シ該費用ハ經理局第三課ヘ請求スヘシ

［編者云、此八年ト廿八年トノ達ハ參考ノ爲メ掲ケタルノミ、此他合祀祭ノ都度アリシモノナリ］



例大祭

例大祭の事を記するには先づ大祭日の沿革を考へざるべからず。

○祭日の項に詳述したればこゝには略す例大祭の始めて行はれしは明治二年九月二十一日にして、同日は特に勅使の御差遣あり、同年十月に至りて一月三日を例大祭中の主なる祭日とし、勅使をば同日御差遣の事に定められしが、明治六年より十一月の例大祭に改められ以て現今に至れり。

かく年中の例大中に一回は必ず勅使の參向あり、且つ例大祭毎に武官には休暇を賜はり、皇族を初め文武百官の社參、幣帛供物の奉納、各軍隊の正式參拜、遺族及各團隊學校生徒等の禮拜、等貴顯縉紳